

鬼強ブロッコリー先輩

忍者にんにく

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大学生だった俺は、サッカーの試合からの帰り道に事故に巻き込まれ、命を落とした……かと思いきや、三国太一に転生していた!?

三国太一は雷門の正ゴールキーパーである。

しかし、その失点イメージと作中での雑な扱われ方から、数多くのイナズマイレブンファンの間でネタにされているサッカー選手である。

折角もう一度サッカーが出来るチャンスを与えられたというのに、俺の未来がそんなんで良いのか？

勿論、良いわけがない!

なつてやるぜ、最強のゴールキーパーによ!

目次

第1話：さらばバーニングキャッチ	1
第2話：何だかんだ必殺技よりも先ず力	5
第3話：雷門の守護神（ただの人間）	9
第4話：初手土下座系主人公	14
第5話：ブロー・コツリーとイナズマの意志	18
第6話：雷が天を裂き、河原に稲妻が落ちる	26
第7話：上り坂は越える為にある（前半）	34
第8話：上り坂は越える為にある（後半）	42
第9話：突如怪しく迫る影	50
第10話：革命の裏側／雷帝の戦い	60
第11話：革命の裏での覚醒	67
第12話：甦るイナズマ伝説	81
幕間：乗り越える者達と乗り越えた者達	90

第1話：さらばバーニングキャッチ

どうも、子供の頃からブロッコリーヘアの三国太一です。 齢8歳の転生者です。

2週間ほど前のこと、ジュニアサッカーチームで練習をしていた俺は頭を強打し、ここがイナズマイレブンGOの世界であり、俺が前世の記憶を持っていることを自覚したというわけだ。

状況を理解しきるには数日の期間を要したが、今では問題なく学校生活もサッカー生活も送れている。 日もチームとしての練習を終えてきたところだ。

そんな俺は現在……

「グハアアアッ!!」

木にロープで吊るしたタイヤに吹き飛ばされ、地べたに這いつくばっている。 チクシヨウ、50kg強の重さは伊達じゃねえぜ!

「もう一回だ! うおおお……!!」

……ぶるああああアッ!」

吊るされたタイヤを投げ、戻ってきたソレを受け止めようとした俺は再びその大きな質量と加速度に吹き飛ばされた。

端から見れば、俺が気でも狂ったのかと思われるだろう。 だが、俺は至って大真面目だ。

これはサッカー……いや、【必殺技】なんてものが存在する【超次元サッカー】の特訓だからだ。 それも、キーパーとしてゴールを守る必殺技の。

『なんでサッカーに必殺技があるんだよ!? 世界観はどうなってるんだ、世界観は!?!』って何処そのマツチヨの如く言いたい気持ちはよくわかる。 スゲー分かる。 何なら俺も思ってる。

ただ一つ、確かな事があるとすれば、この世界では元が一般人であつても努力次第で必殺技を身に付けられるし、超人にもなれる。

だから、俺もこうして必殺技の特訓……もとい、自分の肉体と精神を痛めつける拷問修行をしているという訳だ。

「ゼエ……ハア……絶対に諦めねえぞ……!!」

絶対に「ゴッドハンド」を身に付ける！」

最初に習得するのは勿論、「ゴッドハンド（火）」だ。
やはり、イナズマイレブンといえはこの技だろう。

……バーニングキャッチ？

知らないなあ、そんな技。

……フェンス・オブ・ガイア？

ああ、劣化版無限の壁ね。要らんわ。

……無頼ハンド？

マジン・ザ・ハンドで充分でしょ。

正史の三国さんが覚えていた技の内、「ゴッドハンドX」以外のキーパー技を習得するつもりは無い。なんなら、キーパーというポジションに縛られるつもりもない。

「俺にはイメージがある……」

当面の目標は「コトアールの秘宝」ロココ・ウルパ。

彼はキーパーでありながらも、シユートもパスもドリブルも高い精度でこなすオールラウンダー。間違いなく、世界最高の選手の一人だと言えるだろう。

「やってやる！目標は高く！努力は惜しみなく！

うおおお！……ぐっはアアア！」

〈7年後〉

「何なんだ、この惨状は……」

剣城京介は、驚きを隠せなかった。

本来の予定であればフィフスセクター選手のチームを率いて現雷門イレブンに力の差を思い知らせた上で痛めつけ、雷門サッカー部の主導権を奪い取っている筈であった。

最新の雷門中のデータを基に綿密なシユミレーションを重ねた上での実行、自分達に失敗などあり得ないと信じて疑わなかった。

「よっしや！ 決めろ神童！」

「はい！【フォルテシモ】！」

「ぐわあああ!!」

「ゴオオール！ 雷門、3点目!!」

これは大胆！ キーパー三国がゴール前からペナルティエリアまで上がり、神童がゴールを決めた！

スコアは3対0で雷門がリード！

さあ、後半戦も残り時間もあと僅か！ 雷門、黒の騎士団戦に勝利の王手を掛けました！」

だが、現実はどうだ？

自分達は掛け値なしの全力で雷門を潰しにかかっているにも関わらず、いとも容易くゴールを決められ、勝利どころか雷門のゴールネットを揺らす事すら出来ていない。

その原因はただ一つ。もとい、ただ一人の男の存在だ。

「クソツ、あり得ねえ！ あのキーパー、何処から湧いて出やがった!?!」

事前情報とあまりにも違いすぎる現状に、剣城の中で苛立ちが沸々と湧き上がる。

「さあ、黒の騎士団ボールで試合再開です！」

「寄越せ！」「ぐおっ!?!」

チームメイトからボールを強奪した剣城はペナルティエリアまで単身切り込み、化身を出現させて本気のシュートを放つ。

「はああー……『剣聖ランスロット』!!」

【ロストエンジェル】!!」

化身。それは超次元サッカーにおいて、通常の必殺技とは一線を画す力を宿す存在。化身使いには化身使いでしか対抗出来ず、当然ながら化身必殺技には化身必殺技でしか対抗できない。

一般的にはその法則が成立する。

だが、現在雷門のゴールを守っているこの男……三国太一に於いてはその限りでは無かった。

迫り来る必殺シュートを前に、三国は右手に気を集中させ、赫く輝く大きな掌を空中に出現させ、左腕を引くと同時に右腕を前に突き出

して剣城の必殺シュートに真正面から叩きつけた。

「超・ゴッドハンド!!」

ゴッドハンドが三国の掌に収束する様に消滅した時、サッカーボールは完全に静止して三国の手中に収まっていた。

取ったボールを腕の中で二、三度転がし、笑みを浮かべた三国は剣城へと声を張り上げる。

「良いシュートだ新入生！」

だが、この程度じゃあ無いだろう!?

さあ、俺からゴールを奪ってみせろ！」

敵である筈の自分に、何故か激励を送りながら不敵に笑う三国太一。

その高く分厚く堅過ぎる壁を目の前に、剣城は自分の中の怒りが急激に熱を失い、冷たい何かへと変わって背筋を伝い落ちる感触を味わった。

第2話：何だかんだ必殺技よりも先ず力

どうも、三国太一です。

先日は黒の騎士団チームから0失点という好セーブを見せた俺と、ハットトリックを決めた上で化身までも出現させた神童君の活躍により、雷門中サッカー部を守る事が出来た。やったぜ！

いやー、実に清々しい気分だ！

だが、そんな俺達の尽力にも関わらず、雷門サッカー部の部員は殆ど抜けてしまった。

剣城にズタボロにされた2軍の皆は勿論、黒の騎士団相手に辛酸を舐めさせられた1軍の奴らも一部抜け、代わりに剣城と天馬と信助が入って来た。

まー、仕方ない。予定調和って奴だ。

「浜野、パスだ！」

「あいよー「甘い！」ありや、獲られちった」

「……え、何あの反応速度」

「チツ、相変わらずのバケモンだな」

そんなわけで、原作通り12人での再スタートとなった我々雷門サッカー部は、全員が活き活きとした顔で練習に励んでいる。昨日の今日という事で強度は低く、全体としてはボール感覚と自分の得意なプレーを確認する事が主な目的だ。

その為、部の雰囲気は練習というよりも遊びに近い。俺も浜野、神童、南沢、倉間を相手に4対1をしている。

「三国……こっちに来い！」

「次は俺達の特訓に付き合っつて貰うド！」

「胸をお借りします！」

と、次は彼等を相手に3on1か。簡単にはいかない相手だからこそ練習をする価値があるというものだ。俺はボールを蹴って走り出す。

「ザ・ミスト！」

「そこだ！」

「なっ……!?!」

「【ダツシユトレイン】！」

「シユツ!!」

「クソツ、抜かれた！」

「【ビバ・万里の長城】!!」

「【れっぷうダツシユ】!!」

「ドおおおおっ!!」

濃霧の中から迫り来る霧野をヒールリフトで躲し、正面から猛スピードで突っ込んで来た車田をカットインからの急加速で振り切り、ドンと待ち構えていた天城は真正面から必殺技で突破した。

それぞれの得意分野で圧倒しては見せたものの、予想よりも手応えがあった。この感じは……精神面で成長があった結果のようだな。だが、身体の不調を隠しきれしていない。加減しながら……いや、彼等の指導も兼ねようか。

「おーい、松風！西園！」

「一緒に練習をしよう！」

「…………!! はい!!」

元気に駆け寄って来る一年生コンビ。

天馬も信介も自分達の基本となるプレースタイル……その先のビジョンが見えている。ならば、今の彼等に必要なモノはボール感覚とパス精度だ。

ある程度これらが形に成るだけで、彼等は大きく化けるだろう。原作知識が無かったとしても、彼等のプレーを見ていれば分かる事だ。「今から俺達で連携して、あの3人を抜き去る。」

ドリブルもパスも自己判断で構わないが、今の彼等がベストから程遠いコンディションだとはいえ、今の君達を止める程度なら余裕だろう。

だから失敗しても良い、とにかく自分で考えてプレーしろ。俺は出来る限り応えてみせる、良いな？」

「はい！」「分かりました！」

良い返事だ。

だが、ここからは少しばかり辛いぜ？

さあ、特訓を始めようか！

☆☆☆

「黒崎くん、例のものは？」

「……………」

「結構。今日はもう帰りたまえ」

「はっ……………」

聖堂山中学校の理事長室にて、裏に潜む悪意が蠢き始める。ファイフ・スセクターという隠れ蓑は十分に機能を果たし始め、自分の支配体制は確立されようとしている。

その計画にあたり、男が唯一懸念しているのは雷門中……………伝説のイナズマイレブンを二度も生み出した存在だった。

故に、雷門中に対してはチームの要となるポジションや学校の運営側に息の掛かった人材を送り込み、その機能を停止させて慎重に慎重を重ねて心をへし折る策を進めてきた。そして、それは先日の派遣チームを以って完了する筈だった。

「だが……………」

それは失敗に終わった。

イナズマイレブンは伝説を呼ぶ。やはり、一筋縄では行かない存在だと男は事態を甘く見ていた自分自身に嘆息する。

化身を出しかけたという報告が上がっている神童拓人と新入生の存在もあるが、一番の懸念はこの男の存在だ。

【名前】：三国 太一

【経歴】：IFC東京正式名称はイナズマフットボールクラブ東京。架空のJリーグチームのジュニアユースチーム所属。正捕手として活躍するも、中手骨を骨折し退団。治療に通う姿が確認されるも退団後の動向は不明。

【備考】：優秀な選手だが、思想に難あり。楽園プログラムの適用を前

向きに検討されていた模様。

「全力で潰さねば、な」

かの影山零治は盤外戦術を多用したからこそ失敗したと聞く。だが、今の自分には盤内で有利に進めるだけの力がある。例えそれが「サッカー」から逸脱していたとしても、だ。

「フッフ……フハハハハ!!」

だが、男は知らなかった。

相手が唯の優秀な選手ではなく、怪物であることを。あらゆる意味で規格外の存在である事を。怪物が所属するチームがやられた時のままで終わる筈がないということ。

「ほい、信介!」

「はい!天馬!」

「はっ!」

「おつ、天馬やれば出来るじゃん!」

「はい!なんとなく何かを掴めた気がします!」

「なるほど!んじゃ、その感覚を忘れない内にドンドン行ってみよー」

なにより、怪物の手によって超が幾つも付くほどの天才が第二の怪物へと進化し始めていることを。

「おい。何かとんでもない事になってね?」

「後ろ向きのボールをめちやくちやトラップしてますね」

「初心者だよな、アイツ?」

「そんなん出来ねード、普通」

第3話：雷門の守護神（ただの人間）

【栄都】 【雷門】

3 1 1

栄都学園と雷門中の練習試合は、歪としか言い表し様の無い様相を見せていた。試合が終了した後、スコア的には大敗している筈の雷門イレブンが涼しい顔でフィールドの上に立っており、スコア的には圧倒している筈の栄都イレブンは肩で息をすることでどこかフィールドの各所で倒れ伏していた。

「……これが、今の雷門か」

観客席から試合を観ていた円堂守は苦々しく呟く。

この試合は内容だけ見れば雷門の圧勝だ。序盤から終盤まで運動量で圧倒し、栄都イレブンに必殺技を使わせて体力の消耗を加速させつつ、雷門イレブンのほぼ全員が必殺技を使わずに渡り合ってみせたのだから。

雷門イレブンが態と敗北を選んだ事は、誰の目にも疑いような無い事実として映った。

「インチキをするなー!」

「真剣勝負を見せろー!」

「こんなのサッカーじゃねえ!」

その結果、スタジアムから上がったのはブーイングの声。当たり前前の事だ。彼らはサッカー管理組織フィフスセクターの存在を知らず、ましてや勝敗指示なんてものが下されている事など知りよう筈も無いのだから。

「……………」

喧騒の中、円堂だけが静かに雷門イレブンを見つめていた。

???????

どうも、三国太一です。

一昨日行われた栄都学園と我々雷門中の試合は、結果的にフィフスセクターからの勝敗指示を破る事になった。

天馬からのパスを受けた神童がボレーシュートで栄都ゴールを揺らしたからですね、因果律は収束しましたと。

さて、一昨日の試合で俺は敢えて勝敗指示に従う行動を取った。まあ、相手のシュートでゴールを揺らされるのは癪だったから、そこは全部止めた上で自分でゴールネットに放り込んだという点は違うけど。

我々雷門イレブンがわざと負けたと世間が知った訳である。

「さてさて……おおう、良いじゃん」

イナッターでは#八百長試合、#雷門、#栄都学園などがトレンド入りし、一昨夕方の時点で中学サッカー関連のアカウント各所が炎上した。

栄都学園と雷門中学（恐らくフィフスセクターも）は久遠監督に責任を押し付け、久遠監督は退任に追い込まれた。

そしてあろう事か雷門中は理事長と校長の両方が大義名分を得たとばかりにツラツラと事実無根のでっち上げ声明を出し、久遠道也という男のイナズマジャパンを優勝に導いた経歴も相まってか、炎上にガソリンを投げ込む様な真似をしでかしてくれたのが一昨日の晩のことである。

そして一夜明けた昨日、雷門中の金山理事長や冬海校長の汚職の証拠がネット上に流出したことにより、安全圏から燃料を放り込んだ馬鹿どもに業火となって返ってくる。

雷門イレブンや久遠道也を激しく叩く声から一転、久遠監督や雷門イレブンを擁護する声が大部分を占め、叩かれる対象が事実とは全く異なる声明を出した学校側へと変わり、今朝のテレビニュースでも取り上げられる事態となり、今日は臨時休校となった。

さて、ここまでの流れで作為的なモノを感じるだろう。もちろん、仕組んだ人間がいる。

そう……目金さん達だ。目金さん率いる「メガネハッカーズ」が絶妙なタイミングでネット環境を操作し、情報を拡散してくれたのであ

る。

彼らは一人一人がウイザード級のハッカーであるだけでなく、秋葉名戸にも太いパイプを持っている為に頭数を揃えた人海戦術も可能と、この情報化社会にて絶対に敵に回したくない集団だ。

「ま、計画したのは俺と久遠監督なんだけどね」

黒の騎士団（笑）とかいう厨二病集団により我々雷門サッカー部が半壊した翌日、俺はキツチリと資料を揃え、皆に「自由なサッカーを取り戻す為に戦おう」とプレゼンした。

だが、彼らに植え付けられた強迫観念は強く、納得はしてくれなかった。戦う覚悟を決めてくれるまでは行かなかった。

そこで俺は、全ての事態を好転させるべく久遠監督に相談を持ち掛けた。意外なことに久遠監督はアツサリと俺の相談に乗ってくれて、目金さんまで交えて計画の立案に協力してくれたという訳だ。

後はまあ、簡単なお仕事だった。

練習試合のカードと勝敗指示が来たところ、車田が「俺達が本気を出せば……」などと言い出したので、

「じゃあ、必殺技を封印しても余裕だよな？」

「圧倒的な力の差を見せつけられるよな？」

「まさか、この程度の縛りでその程度の事も出来ないでデカイ口を叩いた訳じゃないよな？」

「普通に演技して実力で負けたと認知されるつもりか？ うっわ、だっせー！」

などと煽ってやったところ、彼等は見事にプライドを刺激され、やる気MAXに。実際の試合では必殺技も使わず、圧倒的な力量差を見せつけた上で負けて見せた。

しかも、相当なストレスが溜まっていたのか、試合終了間際に天馬からのパスを受け取った神童が怒りの勝敗指示ぶつち切りプレーまでやってくれたモノだから、この作戦は大成功と言えるだろう。

とは言え、ここまで上手く決まるとは驚きだ。流石はイナズマジヤパンを世界一に導いた久遠道也と戦術アドバイザーといったところか。いやー……凄いな。

「さてと……タイヤ特訓に行くか」

そして、ここからが本番だ。

形はどうあれ、俺達はフィフスセクターに対し宣戦布告をした事になる。ここから先は一戦も負けられないし、負けるつもりもない。

俺も全力で鍛え上げて来たとは言え、油断していると足元を掬われる。進化し続けなければ、追いつかれて喰い殺される。

やってやらなきやな……!!

??????

「うおおおー！【超・ゴッドハンド】!!」

鉄塔にロープで結びつけられたトレーラー用のタイヤが弧を描き、俺から出現した赤い巨大な掌に衝突する。

凄まじい負担が身体に掛かるが、俺は一步も退くことなく完全に静止させてみせた。

体調は良好、筋肉も関節も損傷は無し、氣の流れもスムーズだ。じゃあ、次は久しぶりにあの技を行ってみようか！

【正義の鉄拳G5】!!

タイヤを思い切りぶん投げ、タイヤが戻って来るまでの時間で俺は頭上にゴッドハンドを出現させ、拳を握る。

力強い踏み込みと共に腰を入れてパンチを繰り出せば、ゴッドハンドは回転しながら猛スピードで飛んで行き、丁度戻って来たタイヤと激突してタイヤの軌道を逸らすことに成功する。

ゴールがあれば、ゴールポストの真芯からボール2つ分外れといったところか、充分だな。

これはあくまで持論だが、正義の鉄拳は真正面からシュートを受け止める事が出来ない状況で使う技だ。円堂さんみたいに真正面から弾き返す必要はあまり無い。

「じゃあ、こんな時はどうする?」

「なっ……ぶるあっ!?」

と回想をしていた俺へと、突如として青い光を放つシュートが強襲

する。咄嗟に目の前に両手を構えてシユートを受け止めはしたが、体ごと吹っ飛ばされてしまった。

「うおっつっ……凄いいシユートだ、一体誰が!？」

「俺だよ」

「んん?」

声の主を探せば、そこにはオレンジのバンダナを額に巻いた精悍な男が……って、円堂さんじゃねーか!？」

アイエエエ円堂さん!? 円堂さんナンデ!？」

しかも、俺がサッカーボールを返そうと差し出せば、何処からともなく取り出した油性ペンでサインしてくれて「プレゼントだ」と仰るではないか! うおおお! 家宝にする気しかしねえぜええ!!

【ゴツドハンド】に【正義の鉄拳】……良い技を習得しているな、三国太一!」

「うおおおおお! 勿体無きお言葉に感謝……って、あれ。なんで俺の名前を?」

「そりゃ知ってるさ。だって……」

一拍おいて、円堂さんは右手を俺に差し出してきた。

「今日から雷門中サッカー部の監督を務めさせて貰う、円堂守だ。よろしくな!」

Oh, 眩しいぜ、太陽マン……

第4話：初手土下座系主人公

「天馬！必要な事だったとは言え、本当にすまなかつた！虫の良いことを言うが、本当のサッカーを取り戻す為に一緒に戦わせてくれ！」
「そ、そんな！頭を上げて下さい！」

俺もハーftimeで聞いた先輩方の気持ちや事情は分かるつもりでいますし、謝る必要なんてありませんから！

それに、後半戦で皆さんが見せてくれたプレーはどれも凄くて……
そんな先輩方が一緒に戦ってくれるなら、願ってもないことです！
こちらこそ、よろしくお願いします！」

どうも、主人公に土下座する転生者です。名をば三国太一と申すつて事でね、雷門イレブンに「俺達は戦うがお前（松風天馬）を認めたくない」的な空気を味わわされている天馬に対して俺は、それはそれは深く誠意を込めて謝罪した訳だ。

長期的に戦っていくプランには、どうしてもプライドも本当にしたサッカーも勝敗すらも投げ捨てて戦う必要があった。そんな中、天馬だけは最後まで本当のサッカーをやるうとしていた。そんな高潔な人間には敬意を払うのが俺のポリシーだから。頭のネジは外しても、仁義は外さない。

「行くぞ三国！」「ソニックショット！」

「ただのキャッチ！」

「……チツ」

「へへっ、良いシュートだったな。軽いけど」

「クソツ、もう一本だ！」

「おっしや、来い！」

それから時は少し経ちまして、雷門サッカー部は現在、河川敷のグラウンドでサッカーの練習に打ち込んでいる。何か思う事があったのか南沢がアホほどシュートを撃ち込んでいるので、俺がゴールキーパーとして練習相手になっていると言う訳だ。

威力自体はタイヤ特訓に遥かに劣るが、所謂「活きた球」をキャツ

チする事自体が有効なのだ。いかに力強いキャッチングを身につけたところで、ボールを捕らえられなければ意味が無いからな。

「円堂さん！行きますよー！」

「ああ！全力で来い！」

「【そよかぜステップ】！」

……ってあれ!? ボールが無い！」

「へへっ、良い技だな！」

「えー!? どうやったんですか!?!」

俺には見えたぜ。天馬がターンしてすれ違う一瞬のタイミング、円堂さんは足の側面をボールに当てて軌道を逸らし、勢いが弱まったところを刈り取ったんだ。

いや、凄すぎる。プロ選手って半端ねーな。

「それにしても」

「あの円堂さんが」

「俺達の監督になるなんてな」

「だド」

「まさか、本気でフイフスセクターと戦う気なのか？」

「え。円堂さんを就任させたのはフイフスセクターじゃないんですか？」

「いや、この状況でそれは無いだろ」

現状、チームはバラバラだ。一つに纏まれば爆発が起きる危険性がある程に。円堂さんもそれを分かっているからこそ、開放的な河川敷のグラウンドを練習場所を選んだのだろう。

そして時は流れ、夕方……

「よし！最後は皆で一本ずつゴールに向かってシュートを撃とう！」

キーパーは無しだ！思い切り行け！」

必殺技を使える奴は必殺技を、そうでない奴はノーマルシュートを撃って、ボールがゴールに突き刺さること10回。

最後は俺……の筈だったんだが、突如として背後からサッカーボールが襲来し、ゴールネットを揺らす。

ボールの出所を探れば、階段を降りてくる剣城が目に入った。

間違いなく剣城が土手の上からシュートを撃って来たのだろう、そんな事は割とどうでも良い。

何故お前は休日に改造学ランを着ているんだ？

「おおー剣城じゃないか！

お前もサツカーやろうぜ！」

「……くだらねえ。お前のその言葉には吐き気がするんだよ」

じゃあ何故こっちに歩いてくるんだ。しかもシュート撃つ気満々じゃねーか。意図せず術中に嵌って我を忘れてるし、その状態じゃ気のコントロールが上手く行かないぞ。まずは気を鎮めんかい。

「[デスソード]！」

円堂さんの顔面を目掛けて放たれたシュートだが、円堂さんが顔を横に逸らして躲した事で背後のゴールに突き刺さった。

なるほど……こりや、器の大きさが違う。

「クソが……」

「へへっ、良いシュートだったなー」

「……あばよ」

円堂さんが拾って投げ返したボールを腿でトラップし、ボールを小脇に抱え直すと、剣城は去って行った。

偉いな。練習場所に来ただけ偉いぞ？

口には出さないけど。彼も望んでないだろうし。

「それじゃ三国、最後はお前だ！」

「押忍ー！[真・ファイアトルネード]！」

ボールを真上に蹴り上げ、炎を纏いながら空中を転がり上がり、上空から炎を纏ったボールを撃ち込むシュート技。俺の放ったシュートはゴールの仰角45度からゴール内の地面に突き刺さり、地面にめり込んで止まった。

「何だと……!?!」

「うおおー！[ファイアトルネード]！」

「おいおい三国！お前分かってるな！」

「[ゴッドハンド]だけじゃなく[ファイアトルネード]まで！」

「ちゅーか、その2つは黄金比っしょ！」

「す、凄すぎます……」

うんうん。皆そう思うよな！だって、俺達は豪炎寺修也と円堂守の再来イナズマイレブン直撃世代だからな。頑張って練習して身につけたんだぜ？

フッフッフッフ……!!

「今日の練習はここまで！」

皆、しっかり休んで明日もサッカーやろうぜ！」

その後、雷門中が授業を再開するまで毎日めっちゃくちゃ練習した。

第5話：ブロー・コツリーとイナズマの意志

「皆さん、おはようございます。」

新しい雷門中学校理事長の雷門夏未です。

我が校の元理事長と元校長が起こした不祥事の数々の影響により、皆さんには大変な負担が掛かったこととされます。

この騒動から学ぶべきこと。それは今回の問題点が不祥事が明るみに出た事ではなく、不祥事を起こした事そのものであるという事です。

私が理事長になった以上、教師も生徒も雷門の名に泥を塗るみつともない行動は許しません。

理事長の言葉として肝に銘じておきなさい」

『はい!!』

ん?……あ、ども。三国太一です。

生で初めて見るが、夏未さん美人過ぎる。そして、カリスマ性が凄い。この場の人間全員が雷門夏未という人間に従っているよ……いや、24歳が出せるオーラじゃないってアレ。まるでフィードの司令塔みたいだ。

そういや前にニュース記事を読んだ記憶によると、自分も所属する実業団チームを作ってサッカーをやってるんだっけ。元々の気質と積み上げた経験を活かしているって感じか。なるほどね。

また、校長は火来さんが再び務める事になった。ここは正式に決まった訳じゃなく、出戻りって形を取った様だな。いや、どうでも良いけど。

ゲーム版の「脅威の侵略者」編で瞳子監督からこの人に編成係が変わった時には「誰だコイツ」と思ったのを覚えている。何なら瞳子監督に戻して欲しかった。

閑話休題。これで雷門はファイフスセクターの支配から完全に脱却した事になる訳だが……この先どうなる事やら。俺の原作知識も役に立たないだろうし、気合いを入れなきゃね。

??????

「皆、ホーリーロード第一回戦の対戦相手が決まった。相手は天河原中だ」

「勝敗指示は1対2で雷門の負けだがな」

時は放課後、ミーティングルームにて円堂監督からの発表と剣城からの注釈が有った。原作なら雷門イレブン全員が意気消沈している場面だが……

「従う必要はありません。」

先日の八百長騒動でサッカー管理組織フィフスセクターはその機能を一部停止、形式的に指示を出しているに過ぎません。これを聞いて、貴方達はどんなサッカーをしたいと思うのかしら？

今までの様な管理されたサッカー？

それとも本気で戦える自由なサッカー？

今ここで答えて頂戴」

「……本気のサッカーがやりたいです。」

雷門の先輩方と一緒にホーリーロードを勝ち抜いて優勝したいです！」

沈黙を破り、夏未さんの質問に一番先に答えたのは天馬だった。

ん、俺じゃないのかって？

そりやそうさ、最上級生の俺が言うのと皆の意思に多少なりとも補正が掛かってしまうからね。俺が黙ったままでも、天馬は勝手に答えてくれる。そーゆー奴だ。

そして、勇気を出した若葉に力添えをするのが俺達の役目だ。

「俺も天馬と同意見だ。俺は『最高のサッカー選手』になりたいと思うからサッカーをやっている。」

奴らに『サッカーの為の信念』も『信念の為のサッカー』も奪わせない。既に奪われているなら取り返す！ホーリーロードで優勝し、成し遂げる！」

「……俺もだ」「……だド！」

「これ以上、俺は惨めなサッカーをしたくない！」

本気でプレーをして、本気で勝って、皆で頂上の景色を見たいんだ！」

「神童……」 「……そうだよね！」

どうやら俺が車田と天城を、神童が霧野と浜野を説得することに成功した様だ。天馬と信介を含め、これで8人が揃った。

まだ腹を決めきれていない奴が2人と、我慢の限界に達してそうなのが1人いるか……とはいえ、俺にこれ以上できる事は無い。円堂さん達大人組もそれは分かっているだろうし、任せても良いかな？

「……決まりね。では、雷門中サッカー部の名に恥じぬよう全力で戦い、ホーリーロードを勝ち抜いて優勝なさい！」

これは理事長としての言葉です！」

『はい！』『応！』

「やるぞゴラア!!」

「目にももの見せてやらあ！」

「絶対に勝つド！」

「……どうなっても知らねえからな」

こちらには雷門夏未と円堂守がいる。あの2人のカリスマを前にした我々に恐怖や躊躇いは風の前の塵に同じ。大体そんな感じの解釈をしたのだろうか、捨て台詞を残して剣城は去って行った。まあ、良い奴だったよ。

「ありがとな夏未！」

だが、お前達に言っておく。サッカーは11人でやるスポーツだ。相手がいくら強大でも、皆で力を合わせれば不可能だって可能になる。無理だって感じた時には一人でなんでも抱え込まないことだ。

よし、それじゃあ練習だ！

気合い入れて行くぞ！」

『応!!』

「??????」
「……………」

やり場のない怒りを感じていた。

脳筋バカ チョココロネ

三国や松風の思想が雷門イレブンに広まりつつある事も、奴らがファイフスセクターの管理サッカーを前にして俺の様に腐らない事も、俺の必殺シュートが三国の守りを破れない事も。

「クソッ……!!」

こんな思いをするくらいなら、いつそのサッカー部から抜けてファイフスセクター側に着き、この怒りをどこかのサッカーチームに押し付ける方が遥かにマシなのでは無いか？

それが良い。あの間抜けた面でサッカーボールを蹴っている監督に言つてやろう。お前の指導には付き合つてられないってな。

「練習にも参加せず、何をしているのかしら？」

「アンタは……理事長か」

「ファーストコンタクトのレディを『アンタ』呼ばわりとは、あまりにも失礼では無くなって？」

「悪いが今の俺は虫の居所が悪いんだ。紳士な対応を求めるならあつちの連中にも頼むといい。じゃあな」

ここで円堂シンプアのこの女と会話するのも時間の無駄だ。さつさと用件を済ませて去ろうとした俺だが、直後に踏み出そうと出したその足を止めることとなる。

「南沢篤志。雷門イレブンのエースストライカーを担い、勉学面での成績も優秀な模範生。ファイフスセクターの管理サッカーを体現した様な整然としたプレースタイルが特徴。現在の目標はレベルの高い高校への推薦を受ける事……だったかしら？」

「詳しいな。何処でそれを知った？」

「あら、雷門の理事長を舐めないことね。私の手に掛かればこの程度の情報収集は造作も無いわ。」

それで貴方、サッカー部も雷門も辞めて転校しようとも考えているのでは無くて？」

「ハッ、よくご存知で。それで、俺に雷門サッカー部に残るよう説得しに来たとも？」

「雷門の理事長つてのは随分と暇らしい」

「あら、随分と思いがられたものね。

私には貴方を引き留める気も無ければ、説得する気も無いわ。だって、今の貴方は弱いもの」

「……はア？」

こいつは今、なんと言った？

雷門のエースナンバーを背負うこの俺を、弱いと言ったか？

どうやらサッカーに関しては素人らしいな。こんなのとマトモに話そうとした俺が馬鹿だった様だ。

「自分と違う意見を聞き入れず、無駄なプライドに固執するお子様。その上、本当に大事な物の為に戦う覚悟を決める事も出来ない半端者が雷門のエースストライカーですって？

笑い話にもならないわ。」

「本当に大切なのは俺の人生だ。内申と進路さえ保証されりや、俺にとって他の事はどうでも良い。何と戦う覚悟を決める必要がある？」

「決まってるじゃない。戦うべき相手よ。」

まず、どこで得た知識かは知らないけど、内申書なんて存在しないわ。教師の主観が入った評価なんて、宛にならないシロモノは邪魔でしかないもの。

そして、他の事はどうでも良いというなら何故、先日の試合で本気のプレーの一端を見せたのかしら？

「適当にベンチに引つ込むなり、理由をつけて欠場する事だって出来た筈なのに、それをしなかった理由は？」

「……あの時は虫の居所が悪かったからだ。偶々あいつらとの試合で憂さ晴らしが出来ると思ったからやっただ。そんな機会をみすみす逃す訳無いだろ」

「それで、スツキリしたのかしら？」

「いいや？ アイツらを見てるとムカついてくるさ。今までの俺の苦勞を踏み躪る様な事をしでかそうとしてるからな。」

「いいえ、無駄にしようとしているのは貴方の方よ。注意深く見てみることにね……神童拓人君のプレーを」

神童のプレーか。唯のパス練習に見えるが……やけにボールが前

の方に出ているな。チヨココロネ 松風は全く追いつけていない。どう見ても松風チヨココロネの下手くそさが際立っている風景だ。

「はーん……なるほどな？」

「泥臭く練習している時代が貴方にもあったから……とかなんとか情にでも訴えたいのか？」

「だとしたら随分浅い説得だな」

「あら、やはりエースストライカーを名乗るには力不足のようね。全く見当違いも甚だしいわ。そうね、分かりやすいようにホワイトボードで解説しましょうか。バトラー？」

パンパンと手を叩くと、橋の上に止まっていたリムジンから執事がホワイトボードを運んできた。

「……え？　は？　何あれ？」

「ここに。夏末お嬢様」

「ありがとう。さて、南沢君。一度しか言わないからよく聞いておくことね。行くわよ？」

「あ、あ……ああ」

さっきの状況には面食らったが、取り敢えず今はこの女の言うことを聞いておかなければ反論しようにもすることが出来ない。

大人しく聞いておくとしよう。

「あの練習はオフエンス終盤、相手のペナルティエリアサイドまでボールを持ち込むワンプレーを想定した練習よ。」

突破力とボールコントロール能力の高い神童君が攻め上がる事で、相手は左サイドに注意を取られる。松風君が並走することでワンツーを警戒せざるを得なくなるから、逆サイドのディフェンダーもあつ程度引き付ける事が出来る。ここまでは良いかしら？」

「ああ、そりやそうだ」

「最低限の理解力があつて何よりだわ。」

さて、そんな状況が最終ディフェンスライン目前まで続いて……ここで天馬君が急にスピードに乗って走り出すとどうなるかしら？」

「そいつにパスが渡った時の状況と神童の突破を警戒するだろ。せつかく包囲したところで、包囲網から外れた奴にボールが渡ったら意味

が無いからな」

「そう、だから……より外側のサイド、DFの真後ろ、キーパーと最終ディフェンスラインの間。それらの内、少なくともどれか一つの場所には意識的なスペースが出来る。」

その場所でボールを受け取るのは……優先警戒度の下がっているFWよ。神童君の想定は、天馬君にパスするフリをして猛スピードで上がって来たFWにボールを預ける、といったところかしらね。

これに先日の練習試合のフォーメーションを当て嵌めて考えると、この位置にいるFWは……」

「俺だ」

目から鱗が落ちる様な思いだった。

言われてみれば簡単な事だというのに、俺は気付かなかった。気付かなかった原因は、フィフスセクターの管理サッカーにこんな戦い方が存在しないから。管理サッカーの戦術に従って結果を出す事だけに拘っていたからだ。

「そう、貴方よ。あの練習が成立していない原因は貴方が逃げ出しているから。貴方には何も見えていないようね。雷門イレブンの皆が織り成すプレーの意味も、貴方が本当に手に入れたと思うている物も」

俺が本当に手に入れたいもの、か。

俺はサッカーで安定した進路を……

「言い訳ね。違うでしょ」

急に胸の奥が熱を失う。鳩尾を氷の短剣で貫かれたかの様な感覚と共に、俺の中の塗り固められた何かを内側から壊そうとしている。

止める……それは……!!

「小学生時代はイナズマKFCでサッカーをしていたのよね。半田くんから聞いているわ。どんなボールにも我武者羅に喰らいつくストライカーだったって。」

当時の貴方はどんな思いでボールを追いかけていたの?」

……止める

「貴方がサッカーを続けてきた理由はもつと根本的な所にある筈よ。」

つまらない体裁で取り繕うなんて10年早くてよ」

……止めろ

「答えは私が言っただけでしょう」

……やめろ

「貴方はサッカーが好きだから」

「やめろおお!!」

「今更、それを認める訳にはいかねーんだよ!」

「だったら……大好きなサッカーを捨て、けどサッカーそのままで捨てる事は出来なくて、それから手段として無感情に扱ってきた俺は……俺の耐えてきた時間は、一体なんだったんだ!!」

「……さあ、知らないわ。」

「まだ何も終わってもいないのに、答えなんて出る筈がないもの」

「ふざけるな! ホーリーロードはもう目の前だ……他校の代表として出る為には、急いで答えを出さなきゃいけねーんだよ!」

「ホーリーロード実施要項には『試合の前に転校手続きが完了していれば、大会期間内でも転校先の学校の代表として試合に出ることが可能』とあるわ。貴方の実績ならスタメンは確実にしようね」

「……………」

「雷門のユニフォームを脱ぐかどうかは、急いで決める事では無いわ。時間をかけてじっくり考えておくことね」

「胸の奥から湧き上がってくるこの気持ちはなんなんだ……凍えそうなくらい冷たくて突き刺さるようなこの痛みは……一体、何だと言うのか!」

「どうして俺は……脳筋ハカ三国達のこと羨ましいなんて思っちまってるんだ……!!」

「とっくに枯れたかと思っていた温かいモノの感触が俺の頬から胸へと伝い落ちて、アスファルトに染みを作った。」

第6話：雷が天を裂き、河原に稲妻が落ちる

ホーリーロード第一試合は天河原中のグラウンドにて行われる。雷門イレブンにとってはアウェーとなる第一試合だが、彼らの士気が落ちる事は全く無い。

「皆、特訓の日々を思い出せ！」

勝利を目指して努力していたあの時間、お前達はサッカーが楽しかって顔をしていた。それは誰かに貰ったものじゃない、自分達のハートで感じたものだった筈だ！

思いつきりサッカーを楽しんで来い！」

『応!!』

円堂守のスピーチに一部を除く雷門イレブンの士気は最高潮に高まり、勝利を目指す者の目にはイナズマが宿る。彼らはそのまま力強さを感じさせる足取りでフィールド入りし、ポジションに着いた。

【雷門フォーメーション】

南沢 倉間

速水 松風 神童 浜野

車田 霧野 天城 西園

三国

【天河原フォーメーション】

安藤 喜多 星降

晴井 隼総 比嘉志 西野空

檜尾 河崎 糸川

三波

ホイッスルが鳴ると共に雷門ボールから試合は始まった。センターサークルから南沢が倉間にパスを出し、倉間から浜野、神童を経由して天馬へとパスが渡る。

「ボールをー」「頂くぜ！」

「させない！【そよ風ステップ】！」

神童さん！」

「良いパスだ……決めるッ！」

プレスを掛けて来た比嘉志と西野空を天馬は必殺技で抜き去り、天馬は神童へとパスを出した。ボールを受け取った神童は圧倒的な走力で天河原の最終ディフェンスラインを突破し、ペナルティエリア内にて三波と対峙する。

「【フォルテシモ】V2!!」

より強く輝きを増した五線譜がボールを包み、一つ上の段階へと進化した神童の必殺シュートが襲い掛かる。あまりの威力と速さに三波は反応することも出来ず、ボールは天河原ゴールへと突き刺さった。

前半2分、雷門中先制。

「ククッ、お疲れさん。」

ここからは俺達の試合だぜ！」

そして、天河原ボールからの試合再開となる。ボールを持った隼総が下卑た笑みを浮かべながら攻め上がるが、雷門イレブンは動こうともしない。

その理由を試合を諦めたからだと解釈した天河原イレブンは益々勢い付き、意味のないパス回しまで披露しながら前衛ラインを徐々に押し上げて行く。

「先ずは一点だ！」

「喜多ア！」

「任せろ！【ヘッドバズーカ】!!」

安藤から喜多へとセンターリングが上がり、喜多が必殺のヘディングシュートを放つ。ボールはその名の通り、バズーカ砲の如き迫力と勢いでゴールへと迫る。

これに対し雷門の守護神こと三国太一は仁王立ちしたまま、全く動く気配を見せない。

『俺達の得点だ！』

「喝ッ!!」

だからこそ、天河原イレブンには油断と隙が生じた。

それらを察知するや否や、三国太一は目にも止まらぬ速さで動き、次の瞬間には片腕で喜多の必殺シュートを完全に止めて見せた。それも必殺技を使わない、ただのキャッチングで。

「……………ッ！なんだと!?!」

「皆、上がれ！速攻だ！」

「車田先輩！」

「任せろ！」

天河原が防衛に注意を向けた時には遅く、雷門イレブンは既に走り出していた。三国からのゴールキックはセンターサークル手前にいた天馬へと渡り、天馬から車田へとパスが渡る。

「行かせねえよ筋肉達磨！」

「【ダツシュトレイン】!!」

「ぶるあああ!!」「ぐわあああ!!」

本来はDF技のダツシュトレインだが、車田はその勢いをOF技に転用し、暴走機関車の如く天河原の選手達を蹂躪する。

「行け、速水！」

「うわ！わっ……………南沢さん！」

「隙あり」「そんなものは無い」なっ!?!」

車田からパスを受け取った速水はプレーに集中できておらず、焦って南沢へとパスを出すも糸川にカットされてしまう。

だが、直後に糸川がパスを出そうと足を引いた瞬間、神童が急接近してボールを奪い取った。

「天馬！」

「ナイスですキャプテン！」

「ここは通さん！」

「浜野先輩！」

「はいはいーっと！」

予め神童と入れ替わる様に中央右側へと移動していた天馬が神童からのパスを受け、さらに右から上がって来ていた浜野へとパスを出す事でプレスを掛けて来ていた河崎を躲しつつ、ボールを繋ぐ。

「行かせるか！」

「行かせて貰うよ、【波乗りピエロ】!!

じゃあねー!!」

焦った樫尾が背後からボールを奪おうと浜野に突進を仕掛けて来るが、浜野は必殺技の勢いに乗って樫尾を突き放した。あつという間にペナルティエリア右まで到達した浜野は、センターリングを上げる。

「頼むよ、倉間！」

「ああ……【サイドワインダー】！」

「甘え！【ラピッドウィップ】！」

倉間が自身の必殺技を放つが、三波の必殺技に跳ね返されてしまう。そして三波を含む天河原イレブンは、またしても油断してしまった。

倉間の背後から猛スピードで駆けてくる神童拓人という存在に気付いた時には既に遅く……

「【フォルテシモ】 V2!!」

「何っ!?..ぐわあああッ!!」

神童の必殺シュートを真正面に受け、その身体ごとゴールに突き刺さる結果となった。

前半10分、雷門が2点目を上げた。

???????

【雷門】 【天河原】

2 1 0

「クッソ、どうなってんだアイツら！」

隼総の視線の先には電光掲示板、その試合点数に隼総は苛立ちを隠そうともしなかった。

先日の騒動を受け、ファイブセクターのエージェントからは勝敗指示の存在を確定させる様な発言をしてはならないと厳しく注意された為、自分から雷門に抗議をする事は出来ない。

最早、自分の任務は完遂できない状況にある。結果を出せないシー

ドはファイフスセクターから除名されるか、「楽園」送りになると聞いている。どちらも隼総にとつて絶望的な道であることに変わりはない。「……皆、聞いてくれ。これより、雷門は何者にも縛られる事なくサッカーをすると神童が言っていた。」

本気で勝負を掛けに来た雷門と勝敗指示に甘んじていた俺達、その差は歴然だ。このまま戦っても、俺達は負けるだろう」

雷門がポジションに戻るまでの時間で何やら話していた喜多が戻り、彼の口からは信じられない言葉が飛び出した。それを聞いた瞬間、隼総の中で歪んだ憎しみが生まれた。

『俺からシードの地位を奪おうとする雷門が憎い』

逆恨みと下卑た悪意が隼総の身体からオーラを引き摺り出し、異形の存在へとその姿を変えていく。

「化身」……隼総の宿す「鳥人ファルコ」が顕現した。

「ふざけんな！そんなの認められるか!!」

テメエら！ボールを俺に回せ!!俺の化身で奴らのゴールをこじ開けてやる!!10点でも20点でも取って、なんと少しでも奴らを敗退させるんだ!!」

そして、試合が再開する。

「オラッ！どけ！」

「テメエ……何をしやがる隼総ア！」

ファーストタッチで喜多は安藤にパスを出したが、背後から走って来た隼総がそのボールを強引に奪い取る。

「行かせるか！」「通さないよつと！」

「邪魔だ雑魚ども!!」

「止めるド！」【ビバ！万里の長城】!!」

「蟻じや隼には勝てねえよ!!」

「行かせない！」「挟み撃ちだ！」

「そんなものが化身に効くか!!」

プレスを仕掛ける神童と浜野を化身で吹き飛ばし、天城の必殺技を化身と共に空を翔ける事で回避、信介と霧野のディフェンスを強引に突破し、隼総はペナルティエリアにまで侵入する。

向かい合うは雷門の守護神、三国だ。

「喰らいやがれ！【ファルコウイング】!!」

「超【ゴッドハンド】!!」

化身と共に上空から撃ち出されたシュートが凄まじい威力と勢いで雷門ゴールを強襲する。しかし、三国の右手から出現した紅の掌が真正面からシュートを捉え、やがて収束する様に消滅する。

果たして、ボールは三国の右手に収まっていた。

「ば、馬鹿な!?…俺の【ファルコウイング】を止めやがった!?

一体、何が起きたと言うんだ!!」

やあ、どうも。解説の三国太一だ。

突然ではあるが、何が起こったのかを解説しよう。

化身必殺シュートは確かに強力な必殺技だ。

だが、強力な故に致命的なまでの弱点がある。

『残念だが、その位置は遠いな』

技の威力を最大限に発揮させる為の「助走距離」が必要である為、通常の必殺技よりも離れた場所から技を出し始めなければならない。

これは訓練である程度は克服する事が出来る弱点だが、多くの化身使いはその威力に溺れ、弱点の克服を怠る傾向にある。

この隼総とかいう奴もその一人だな。

さて、そんな遠くからシュートを撃つたとなれば、ゴールキーパーが気を溜めて必殺技を発動させる準備を完了させても十分過ぎる程の時間的な余裕が生まれる。

つまり、相手からすればキーパーに準備をさせてしまうだけでなく、コースまでも読まれてしまう諸刃の剣なのだ。そうなれば……

「超【ゴッドハンド】!!」

シュートは正面から捉えられる。後はキーパーが全力で止めるだけだ、ただの強力な必殺技と変わらない。

以上!さらばだ!!

ぞ?????の後の試合は特に語るポイントもない。

前半は隼総が敵味方問わずボールを強奪しては強引に持ち込み、「ファルコウイング」を撃ち込むといった攻撃を仕掛けて来たが、俺はこれを全て防衛し、前半0失点で抑えることに成功した。

また、その間にも雷門はカウンター攻撃を仕掛け、更に1点の追加点を挙げて前半が終了した。

そして後半。化身の使い過ぎにより隼総が倒れ、担架で運ばれて試合を離脱。代わりに入ってきたのはシードでも無い普通の選手であり、天河原の戦力は絶望的とも言える状況だった。

しかし、天河原が最後まで勝負を棄てることは無かった。キャプテンの喜多を中心に攻め上がっては気迫の籠ったシュートを撃ち込み、雷門ゴールを何度も脅かした。

しかし、気迫だけで勝てるほど勝負の世界は甘くない。俺はそれらのシュート全てを正面から受け止めて前線へと送り、後半でさらに5点の追加点を挙げることに成功。

最終的に、8対0という圧倒的なスコアで雷門イレブンはホーリーロード第一試合に勝利した。

「やりましたよ、三国先輩！」

俺、新しい必殺技を身につけたんです！」

「マツハウインド」……だったよな？

速さがあるし、何よりシンプルだから色々と応用が効きそうな良い技だと思うぞ。おめでどう！」

「ありがとうございます!!」

因みに5点中1点はこの天馬の必殺技だ。元々あつた必殺シュートの構想に、南沢のソニックショットと隼総の化身シュートのイメージを合わせる事で完成したのだとか。

え、何を言ってるのこの子。そういう0から必殺技を生み出す工程って普通はもっと膨大な時間が掛かるものじゃないの？

というか、「マツハウインド」の習得ってもう少し後のイベントだった筈なんだけど……どういうことだっただよ？」

「南沢も倉間もお疲れ様！」

「2人は2点ずつの得点だったよな?」

「ええ、ハットトリックを逃したのが悔しいです。」

三国さん。俺、今日のサッカー楽しかったです。もっとやりたい、なんて思ってしまった」

「……!! それって、つまり?」

「俺も腹を決めました。俺も皆と一緒に本当のサッカーを取り戻す為に戦います。最後まで俺達のゴールを預けますよ?」

「ああ。ゴールの事は心配するな!!」

散々ネタにされて来たこの台詞も、今の俺なら胸を張って言える。でもそれは、「俺T u e e e!」などといった自己中心的慢心から来るものじゃない。

俺の背後には守るべきゴールがあり、俺にはボールを預けられる仲間がいる。それだけで不思議と力が湧き上がってくるのだ。

……ああ、そうか。これが「サッカーが楽しい」って事か。

今まで、サッカーの楽しさとは「目標に向かって努力している間に味わう充実感」のことだと思っていたが、どうもそれだけでは無かったらしい。

「ふっ随分と懐かしい気がしますね、円堂さん?」

「ああ。時代が変わっても『サッカーをやりたい』『サッカーが楽しい』って気持ちは変わらない。」

そんな思いを抱えたヤツらが集まるのがこの場所だからな」

雷門中サッカー部

春奈と円堂の会話はイナズマキヤラバンのエンジン音に阻まれ、車窓から見える夕陽の様にゆっくりと消えていった。

第7話：上り坂は越える為にある（前半）

どうも、三国太一です。

2回戦の相手は万能坂中に決まった。

だが、原作と違って雷門の理事長と校長が完全に俺達（というより、円堂さん）の味方であるため、雷門イレブンの士気は上がりにつながっている。そして何故か、南沢の脱退イベントも発生しなかった。

だが、予想外の出来事はこれで終わりではない。その日は更にもう一つ、大きな変化があった。

「……………」

「ハイ少年、サッカー部に何か用事か？」

「うわわっ！ 気付かれた!！」

「もしかして、見学希望者かい?！」

「い、いえ！ 見学ではなく、入部希望です!！」

「ん、歓迎するよ! どうぞ中に入って!！」

「し、失礼します!!！」

青紫色の髪をした少年がやって来たことである。お察しの通り、影山ア！の甥である影山輝^{かげやまひかる}少年だ。

サッカー棟には既に円堂さんと音無先生が来ていたので、俺は影山少年を二人の下へと案内してから自分の練習へと向かった。

きつと円堂さんも音無先生も彼の素性を聞いた時には大層驚いたことだろうが、その後の様子を見る限り、大した問題にはならなかった事は確かだ。

それから俺達は練習した。自分達のプレーから管理サッカーに抑圧されていた影響を取り除く為、思い切りプレーする事を心掛けて。

時間は1週間しか無かったが、元々彼らは名門校でレギュラーを張る実力者。錆を落とすだけでも動きがかなり改善された。

そして、俺達はホーリーロード第二回戦を迎える。

???????

「円堂監督。俺を先発で出せ」

「……良いだろう」

「円堂監督！正気ですか!？」

「俺は至って真面目だ。スターティングメンバーを発表するぞ」

試合の直前、剣城からの申請を円堂は承認した。

当然、雷門イレブンを代表してキャプテンの神童から不満の声が上がるが、円堂の決定は覆らない。

【雷門フォーメーション】

剣城 倉間

南沢 松風 神童 浜野

車田 霧野 天城 西園

三国

【万能坂フォーメーション】

光良 磯崎 白都

永久 毒島 潮 逆崎 倉ノ院

蒲石 大沢田

篠山

「松風、神童。俺はこの試合でお前達のサッカーを潰す」

雷門中对万能坂中の試合は、万能坂ボールで開始された。磯崎からボールを受け取った潮が白都へとパス。白都はそのまま攻め上がる
うとするが……

「なっ、ボールが!？」

「頂くぜ。テメエらも来いッ!!」

「なっ……!？」

「アイツ、企んでやがったな!」

「そこまでするかよ!」

なんと、白都からボールを強奪した剣城が雷門ゴールを目指して走り出す。その後を追うのは光良と磯崎だ。雷門イレブンは剣城の意

凶に気付いたものの、攻撃に向けて動き出していた為に対応出来るのがゴール前まで下がっていた霧野と天城だけであった。

霧野は素早く磯崎をマークすべく走り出し、天城が剣城と光良を抑えに掛かる。

「行かせないド!!」

「おらよ」「え、ちよ!？」

「【ビバ!万里の長城】!!」

「ぐわっ!？」「ナイス踏み台」

天城が接近した瞬間、剣城は光良へとボールを回し、光良は天城の必殺技を喰らってボールを取り零す。

その溢れ玉を剣城が回収し、剣城は雷門ゴールへと再び高速で走る。それを見た霧野は磯崎のマークから外れ、剣城を抑えるべく走るが間に合わず、剣城は雷門ゴール前にて三国と向き合う。

「はあああ!『剣聖ランスロット』!!」

【ロストエンジェル】!!」

「ははっ、なるほど!そう来たか!

【ボルケイノカットV3】!!」

味方選手が故意にゴールキーパーに出したキックにキーパーは腕を使って対応することが出来ない。故に三国は剣城の化身必殺シュートに対し必殺技を繰り出し、生み出された炎の壁がボールの勢いを完全に殺しきる。しかし三国が着地する前に、ボールが落ちた先には霧野のマークから外れた磯崎が走り込んでいた。

「貫ったアー!」

「させん!【正義の鉄拳G5】!!」

「なっ!？」

三国の体勢を見た磯崎は溜めの要らないノーマルシュートを選択。しかし三国は空中でゴッドハンドを出して拳を握ると、着地と同時に身体を捻りながシュートへと向けて撃ち出す。

ゴッドハンドの拳は見事、シュートを明後日の方向へと弾き飛ばし、ボールはサイドラインを割った。

「クソッ!俺のシュートを弾きやがった!」

「化け物かアイツは……」

「馬鹿げた身体能力だ」

「普通あんなプレーが出来るか？」

「出来たからこうなってるんだろうが！」

「おい、落ち着けよ磯崎。俺達のやるべき事は他にあるだろう……分かってるな？」

「その通りだ。切り替えろ」

「チッ！」

絶好のチャンスを決められなかった万能坂イレブンだが、彼等のリアクションは薄く、ニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべていた。

「白都！」

「よっしゃ、磯崎！」

「させない！」

不穏な空気が漂う中、試合は万能坂のスローインから再開した。倉ノ院のスローインを白都が受け取り磯崎へとパスを出すも、霧野がこれをカット、ボールを奪い取る。

直後、周囲を見渡してパスコースが消されている事を確認した霧野はドリブルを選択した、その時だった。

「潮！逆崎！やれ!!」

「なっ、ぐわあああああッ!!」

潮のスライディングが霧野からボールを奪い取り、逆崎のスライディングがボールの無くなった真正面から霧野の右足へと突き刺さる。

霧野は悲鳴を上げながらフィールドに倒れ込み、右脚を抱えて蹲ってしまった。

「今のスライディング……まさかアイツら!？」

「霧野！」

「審判！ファールだ！」

「え!?!ノーファール!？」

凄惨な光景を目の当たりにした剣城は何か気付き、霧野を心配した神童と天馬は審判へと抗議の声を上げる。しかし、万能坂の選手が

視界を塞いでいた為に審判の笛が鳴る事はなかった。

「【ダッシュユトレイン】！」

「うおっ!？」

「オラッ、クリアだぜ！」

それを認識した車田がゲームを中断させるべく必殺技を使用して潮からボールを奪い、その勢いのままボールを持ってサイドラインの外へと出る。これにより、ゲームは一時中断となった。

「霧野、ベンチまで運ぶぞ？」

少し我慢してくれ」

その間にゴール前から走ってきた三国が霧野をいわゆる”お姫様抱っこ”で抱え上げ、他の雷門イレブンも彼等を取り囲む様にベンチへと歩を進める。

その中には剣城の姿もあった。純粋に霧野を心配する他のチームメイト達と違い、彼の目的は自分の中の確信に近い疑念を確かめる事だったが。

脚の装備を外されて露わになった霧野の足首は赤黒く変色し、腫れて盛り上がっていた。

「酷い、なんて腫れ方なの……!？」

「マズイわね、折れているかもしれないわ。直ぐに救急車を呼びましょう！」

「音無先生……救急車は待つてください……俺は、この試合を最後まで見届けたいんです……」

「駄目よ！私は顧問として、円堂さんは監督として貴方達を守る義務が「分かった」円堂さん!？」

「春奈、応急処置を頼む。霧野、しっかりとアイツらのプレーを観ておけよ。速水、行けるな？」

「うええ!?! は、はい……!!」

「お前達はフィールドに戻れ。試合はまだ終わってないぞ！」

「ですが、円堂監督……」

そして、その場で立ち尽くす雷門イレブンへと、円堂は彼らにポジションに戻るよう指示を出す。

「霧野はお前達のプレーを見届けると言った。

今の霧野に必要なのは同情なんかじゃない、お前達の勝利だ！

試合が始まったらサッカーだけに集中しろ！フィールドの外での事は俺達がなんとかする！

だから全力で戦って、勝って来い!!」

『……………はい!!』

円堂の言葉に雷門イレブンの戦意が戻る。選手交代で霧野の代わりに入ったのは速水だ。霧野の位置に神童が下がり、空いた神童の位置に南沢が移り、南沢の位置に速水が入る形でフィールドの各ポジションへと散っていった。

【雷門フォーメーション】

剣城	倉間		
速水	松風	南沢	浜野
車田	神童	天城	西園
三国			

「間違いねえな。それに、あの腫れ方……スパイクに仕込みまでしてやがる」

一方、霧野の怪我を見た剣城は、彼の怪我が通常のプレーでは起こり得ない重症である事に気が付いていた。

そこから万能坂イレブンが改造スパイクを使用しているという事実を見抜き、磯崎へと努めて冷静に声を掛けた。

「おい、やり過ぎじゃないのか。今の危険なプレー、お前達はアイツからサッカーを奪うつもりか？」

「ハッ、知ったことかよ。ファイフスセクターに反逆する様な奴は、二度とサッカーなんて出来なくなっちまえば良いのさー!」

「へエ……そうかよ」

磯崎から返って来たのは剣城のトラウマという地雷原を大いに刺激する内容の言葉。それを聞いた瞬間、剣城の双眸にドス黒い怒りが宿る。

チームメイトを怪我させられて怒り心頭の雷門イレブンと、自分が最も嫌う思想を持つ万能坂イレブンに激しい怒りを抱く剣城。

偶然にもこの試合で雷門中というチームは感情を一つに纏まろうとしていたのだが、その事実が気が付いているのは果たして何人いるのか。

そして、万能坂中からのスローインから試合が再開する。倉ノ院からのスローインを受け取ったのは逆崎だ。逆崎はそのまま雷門ゴールへと攻め上がろうとするも、それが敵うことはなかった。

「[デスソード改]!!」

「[バットアタツ……ぐわああっ!!」

一瞬で逆崎の目の前に回り込んだ剣城がボールを強奪し、その場で万能坂ゴールへと向けて必殺シュートを放った。篠山は慌てて必殺技で迎え撃つも、剣城の必殺シュートを止めるには至らず、その身体ごとゴールに突き刺さる。

前半7分、雷門が先制点を獲得した。

「なっ……剣城テメエ!」

「どういうつもりだ、剣城!」

「剣城。お前、サッカーを潰すんじゃないやなかったのか?」

「ああ、一体どういう風の吹き回しだ?」

「潰すさ、この腐りきったサッカーをな!!」

そして、万能坂ボールで再キックオフとなる。試合再開のホイッスルが鳴ると同時に剣城は駆け出し、瞬く間にボールを強奪したかと思えば、単身万能坂ゴールへと切り込んでいく。

だが、万能坂も馬鹿ではない。ゴールキーパー以外の全員で剣城を包囲し、ボールを奪うべく攻撃を開始する。

「囲め!」「おう!」

「チツ、鬱陶しいんだよ!!」

「剣城!こっちだ!」

「……………」

「剣城!パスを出せ!」

「……………」

「剣城!一人で戦おうとするな!」

「うるせえ!!」

「邪魔だお前ら、どけ……くっ!?!」

「奴らが邪魔で突破できねえ!」

そこからは千日手とも言うべき試合内容となった。

万能坂の選手達の能力では剣城からボールを奪うどころか身体に触れる事さえ出来ない。

剣城は並外れた体力を持っている為にスタミナ切れを起こす事は無く、雷門イレブンを頼るつもりも無いのでパスを出すつもりもない。

雷門イレブンは剣城からボールを奪うために突破しようとするも、万能坂の選手達が邪魔で剣城の下へと辿り着くことが出来ない。

剣城がひたすら万能坂の包围網の中でボールをキープし続け、前半終了を告げるホイッスルが鳴った。

第8話：上り坂は越える為にある（後半）

ハーフタイムが始まってすぐの雷門ベンチは霧野を案じる者、剣城に怒りをぶつける者、後半戦に向け思考を巡らせる者の三つに分かれ、混沌を極めていた。

しかし、その状況を収めた者がいた。

「皆！この試合に勝ちたいか！」

『おう！』『当たり前だ！』『勿論です！』

三者三様の返答を聞いて、円堂が浮かべたのは笑みだった。

「だったら、一人でボールを追うんじゃない！全員でボールを追って、全員でゴールを目指すんだ！」

「しかし、ボールが取れないことには！」

「後半も俺はボールを奪うぜ。奴らを潰すのに、敵も味方も関係ねえ」

「コイツが封じられたら何も出来ないド！」

「いいや！出来るさ！」

車田が反論し、剣城が煽り、天城が怒りを露わにするも、円堂はその言葉を明るく否定する。

「1人で無理なら2人で！」

2人で無理なら3人で！」

それでも無理なら11人で!!

皆で力を合わせれば、サッカーで出来ない事なんて無いんだ！」

「後半は11人全員でボールを奪いに行く……って、本気で言ってるんですか!？」

「フォーメーションも崩れますし、そもそもチームとして機能するかも分かりませんね……」

「それは最早、サッカーじゃねえだろ」

「子供の頃のボールの奪い合いみたいな感じ?」

神童が驚き、速水がネガティブな発言をし、南沢が冷静な突っ込みを入れ、浜野が分かりやすいイメージを共有する。

それらを聞いた円堂は満足気に頷いた。

「そうだ、サッカーの形は一つじゃない。

チームの皆でボールを追いかけて、チームの皆で一つのゴールを目指せば、それはサッカーなんだ！」

「なんか深い言葉だね」

「うん。本当にそう思う」

「(うおお！今日の格言!!)」

「……!!」

西園と影山が頷き合い、三国は何処からともなくノートを取り出して円堂の言葉を一言一句違わず綴り、天馬は胸に手を当てて瞑目する。

そして、円堂は一際大きな声で言った。

「皆！サッカーやろうぜ!!」

『……!! 応っ!!』

「チツ……」

ある未来では悪魔の呪文と呼ばれた台詞。そして、かつてイナズマイレブンを甦らせ、エイリア学園の悲劇から多くの人間を救い、イナズマジャパンを世界一へと導いた掛け声。

雷門イレブンは全員胸の奥から広がる熱さを感じながら、剣城以外の全員で気合の入った雄叫びを上げた。

そして、ハーフタイムが明けた現在、前半とハーフタイム中の喧騒が嘘の様に霧散し、雷門イレブンはチームとしての纏まりを見せている。

その結束はさながら別チームであり、その強さは推して測る間でも無く比べ物にならない程、強い。警戒して然るべきと言えるだろう。

「今更東になったところで」

「前半と同じだ」

「お前らはこの後、何も出来ない」

「とつとと這いつくばるんだな」

しかし、悲しいかな。

万能坂イレブンは紛うことなき無知であった。

監督も選手もその全員が『前半と同じく剣城を封じ、雷門イレブン

がプレーに集中を欠くまで粘る。そして奴らが油断したところで化身シュートだ。一度崩れたものは立て直せない。あとはもう一点取って俺達の勝ちだ』などと考えていたからである。

万能坂中は、この期に及んで雷門イレブンを舐めきっていた。それが命取りになると判断できるほど、彼等は勝負経験を積んでいなかったのである。

そして、試合再開のホイッスルが鳴る。

ボールは倉間から剣城へ。剣城は凄まじい速度で攻め上がるが、それを読んでいた磯崎と光良が中心となり、足止めにかかる。

「ふはは！馬鹿め！お前達、剣城を囲め！」

「ケヒヒ！」「ヒヤツハア！」

「鬱陶しい奴らだ……！」

瞬く間に剣城の包囲網が完成し、万能坂は前半の如く剣城とボールを封殺する事に成功した。

……それが、雷門イレブンの仕掛けた罠であるとも気付かずに。

「今だ！行くぞ!!」

『うおおおおおおお!!』

「な、なんだ!？」

「構うな！ここで奪えば得点だ！」

「おうともよ！」

神童の号令と同時に、フィールドの各所に散らばっていた雷門イレブンが全員各々のポジションを投げ捨て、雄叫びを上げながら剣城を取り囲む包囲網へと突撃していく。

「行くぞ！天城!!」

「おう！やってやるド!!」

最初に仕掛けたのは三国と天城であった。

体重100kgを優に超える天城の身体を三国がウエイトリフティングが如く頭上へと挙上し、天城の身体が更に何倍にも巨大化する。

「アイツらまさか……チツ!!」

「ボールが溢れた！今だ！」

「へへっ、馬鹿め！」

「一点頂きだぜ！」

「おっしやあッ!!」

「メガウオール!!」

『ぐわあああああつ?!』

剣城が回避運動に移った次の瞬間、なんと三国は巨大化した天城を包囲網のど真ん中に投げ込んだ。

その巨大な質量攻撃は包囲網に参加していた万能坂イレブン全員を吹き飛ばす規模の振動と衝撃を引き起こし、膠着状態を強引に破壊する。

「僕だって雷門の一員だ！車田先輩！」

「良いパスだぜ西園！神童！」

「繋げ、天馬！」

「分かりました！浜野先輩！」

「よっ、と。任せたよ、倉間！」

「ああ、任せろ……!!」

衝撃波に乗って吹き飛ばされたボールは雷門ゴール側へと飛ぶも、西園信介が凄まじいジャンプで回収し、ヘディングで車田へとパスを送る。このパスは見事に通じ、神童、天馬、浜野を経由して倉間へとボールが渡る。

キーパーと一対一になった倉間はボールを両脚で挟み、後方宙返りと共に空中へと打ち出す。必殺シュートの構えだ。

「サイドワインダー!!」

連続蹴りと共に撃ち出されたシュートは大蛇のオーラを纏って天河原ゴールを強襲する。

「機械兵ガレウス!!」

「ガーディアンシールド!!」

しかし、そのシュートが天河原のゴールネットを揺らす事は出来ず、天河原のゴールキーパー篠山が出現させた化身の必殺技によって弾き返されてしまった。

そう、弾き返されたのだ。本来「ガーディアンシールド」はキャツ

チ技である。つまり、倉間の必殺シュートは篠山がキャッチ出来る威力を完全に超えていた事になる。その事実は一瞬だが化身の使い手に動揺を生み、それをチャンスと見た男が溢れ球へと迫る。

「貰った……【ソニックショット】!!」

「まだだ! 【ガーディアンシールド】!!」

「何ッ……!?!」

南沢が音速の名を冠する必殺シュートを放ったが、天河原ゴールを守る化身がその出力を落とす事は無かった。流石はファイフセクターにて選手強化プログラムを受けたシードであると言えよう。再び化身必殺技が繰り出され、化身の構えた盾にシュートが突き刺さる。

「惜しかったな! 化身はまだ生きているぞ!」

「ああ、まだ生きてるさ。俺達のシュートもな!」

「何っ!?!」

セーブを確信していた篠山へと、更なる追撃を仕掛けようと迫る男の姿があつた。オレンジ色のキーパーユニフォームを身に付けたその男は、体に纏った烈風の上に炎を展開し、身体を捻り回転させながら跳び上がる。

「真【ファイアトルネード】!!」

「ぐっ! この、力……ぐわああああ!!」

跳び上がった三国がボール越しに化身の構えた盾へと蹴りを叩き込むと、ボールは炎を纏って力を増す。力の均衡は一瞬で崩れ去り、化身ごと盾を砕いてボールはゴールへと突き刺さった。

後半3分、雷門が2点目を挙げた。

それからは一方的な試合展開となった。

万能坂は剣城一人ごとボールを封じることまで試合展開を止めていたに過ぎず、雷門と万能坂では元々の力量が段違いなのだ。

「【ロストエンジェル】!!」

「【ガーディアンシーぐわああ!!」

「【ソニックショット】!!」

「【バットアタああああ!!」

「サイドワインダー」!!

「バットアタっぐああああ!!」

「マツハウインド」!!」

「駄目だ！化身じゃないと……うわああ!!」

「デスソード」

「む、無理だ……」

「ソニックショット」!!」

「もう嫌だああ!!」

「サイドワインダー」!!」

「た、助けてくれえ!!」

「ソニックショット」!!」

「……か、勘弁して……」

「ダツシユトレイン」!!」

「ぐわああ!!」

「ビバー！万里の長城」!!」

「ぎやああああ!!」

「うおりやああ!!」

「へっ、何処狙ってるんだチビ！」

「アインザツツ」!!」

「な、に……っ!？」

「奇術師ピューリム！」

「マジシャンズボックス」!!」

「本気キャッチ」

「嘘だろ……化身シュートがただのキャッチで止められた……」

「そんなバカな……俺の化身が……」

『ここで試合終了のホイッスル！』

最終スコアは10対0！雷門中が圧勝！

見事、ホーリーロード地区大会準決勝へと駒を進めました!!」

雷門イレブン全員を警戒せざるを得なくなった万能坂イレブンでは雷門イレブンの猛攻を防ぐ事や鉄壁の守備を突破する事など出来る筈もなく、ましてや怪物の守護が付いている雷門のゴールをこじ開

ける事など更に不可能だった。

万能坂イレブンは雷門を潰すどころか、真つ当な超次元サッカーで純粹に負かされ、肥大化し過ぎた自尊心やらシードの誇りやら諸々を全て粉々に砕かれてフィールドを去って行った。

「皆！お疲れ様！良い試合だったな！」

最後の一秒まで全員がボールを追いかけ、全員でゴールを目指した結果だ。これは俺達にとって大きな意味を持つ！

今日はゆっくり休んで、明日からまた特訓だ！」

『おおっ!!』

そして、多くの場所で多くの人とのサッカーを通じて本当のサッカーの辛さや険しさ、苦しさを経験してきた円堂守に、相手への遠慮や圧勝への呆れなどといった甘さは存在しない。

正にこの監督にしてこのチームあり、と言ったところだろうか。

「剣城。今日はありがとう」

「勘違いするな。俺一人の力で戦うより、テメーらを利用して戦った方が奴らを叩き潰せると判断しただけだ。次は俺がお前らを潰す」

フィールドの外で青春劇を繰り広げる剣城京介と松風天馬。サッカーで過去を拭おうとしている者とサッカーで未来を切り拓こうとしている者。彼らがコインの表裏のように息を合わせる様になるまでは、まだまだ時間が掛かるだろう……通常ならば。

彼らは忘れていた。その状況を一人で破壊する悪魔のようなブルッコリーが彼らの側にいることを。

「にしても俺達って強くね？」

「ああ、少なくとも地区大会は敵無しだ」

「ガハハ、勝ったな。牛丼食ってくるド」

「油断するな。ホーリーロードは始まったばかりだぞ」

「去年より強くなってるのは俺達だけじゃないからな」

「ええ、緊張を保ちましょう」

雷門イレブン……彼らは気付いていない。

原作にて四面楚歌の状況故に乗り越えざるを得なかった試練を自分達が体験しておらず、精神面で脆くなっているという事を。

その試練を尽く破壊した鬼神の如き男が、雷門イレブンに原作よりもずっと大きな試練を呼んでしまったという事を。

「スーパ―の特売日は明日だっけか。」

雷門中に寄って特訓してから帰るか」

そして、三国太一は知らない。

スーパ―の特売日は明日ではなく今日であり、後に慌てて走って向かう羽目になるという事を。

何より、少し先の未来の自分がとんでもない事をやらかしてしまい、更なる原作破壊を生んでしまうという事を。

嵐の前の静けさの如く、空はどこまでも青く澄み渡っていた。

第9話：突如怪しく迫る影

ガンッ!!

乱暴に蹴り飛ばされたサッカーボールが橋の鉄柱に当たり、激しい音を立てる。巨大な質量と剛性を持つ柱は微動だにせず、跳ね返ったサッカーボールが天高い軌道を描いて後方300mは離れているであろうゴールへと入り込んだ。

剣城京介は苛立っていた。ファイブセクターから受けた指令は「兄の足を治す手術費用を出す代わりに雷門中サッカー部を潰せ」というもの。シードの中でもトップクラスの實力を持つ自分にとっては、あまりにも容易い条件だと思っていた。

しかし、蓋を開けてみればどうだ？

雷門のゴール前には怪物が住み、怪物に感化された雷門イレブンはその強さを遺憾なく発揮し、協力者だった雷門中の理事長と校長はスキャンダルにより失脚させられ、雷門中の監督にはイナズマ伝説を作り上げた円堂守が就いたではないか。時間を掛ければ掛けるほど、ファイブセクターの指令を達成するどころか、達成が遠のいて行く。

「クソ……!!」

エージェントである黒崎からはファイブセクターからの支援の打ち切りを迫られたばかりだ。

これは剣城にとってファイブセクターからの除名宣告にも等しかった。恐らく、この先自分が何をどうしようかと雷門を止める事は出来ないだろう。ファイブセクターからの支援打ち切りは確定事項だ。そうなれば、自分が今までサッカーをやって来た理由が消失する。今の剣城にとってサッカーをする理由は、兄にサッカーの出来る脚を返してやる事なのだから。

「はあ……どうすりゃ良いってんだよ」

「剣城京介だな。来てもらおうぞ」

突如として不気味な声が背後から聞こえたと思った時には遅かった。何者かに背後から組みつかれた剣城は抵抗する間もなく絞め落

とされ、その意識を闇へと葬られた。

「実に容易い仕事だ。後はアイツの所へと連れて行けば完了だな、フハハハ!!」

剣城を絞め落とした男は深緑色の髪を掻き上げ、褐色の肌とは対照的な白い歯を覗かせて豪快に笑う。緋色の虹彩を宿すその目にはギラついた戦意が見え隠れしていた。

その男はバイクの様なビークルに意識を失ったままの剣城を乗せ、自分も乗り込んでハッチを閉じる。一陣の風が吹いた次の瞬間、河川敷のグラウンドには初めから何も無かったかの様に、男もビークルも剣城京介もその姿を消していた。

??????

「剣城が休む?」

「ええ、なんでも大事な用事があるとかで……ご家族の方から連絡があつたんです。ただ、次の試合には間に合わないかもしれないと……」

「そう、か……」

春奈の言葉に円堂は考え込む様子を見せる。二週間後に控えたホーリーロード地区大会準決勝、雷門中の次の対戦相手は帝国学園だ。

「昨年まで試合監督を務めていた人物が退職し、元イナズマジパンのメンバーである佐久間次郎が今年から新しく試合監督の座に就いたと聞いている。」

元より強い帝国が、佐久間の指導によって更なる進化を遂げているのは想像に難くない。これに対抗する為、円堂は雷門イレブンにはチームとして強くなる事が必要だと考えていた。

その為には剣城に真の意味で雷門イレブンの一員となってもらい、チーム全体の蟠りを解消する必要があった。チームメイトを信じ合いきれないチームはプレーに精彩を欠くからだ。

だが、それが望めなくなった以上、別の手を考えねばならない。成

長幅の不足分は方略で補う必要があるという考えに行き着いた。

「(正直、この手のやり方は苦手なだけ……) 春奈、帝国の選手のデータはあるか?」

「ある事にはありますが……帝国は本年度に入ってから一度も本気の試合を見せていません。誰がシードなのか、誰が化身使いなのかも不透明です。データは当てにならないと思います」

「だよなあ……」

柄にも無く選手のデータを集めて傾向と対策からどうにかしようと考えた円堂だが、春奈の言葉にその考えを振り払う。

そもそも円堂はデータよりもチームメイトとの感覚で試合するタイプのプレーヤーであり、その手の作業は絶望的に向いていない。円堂は改めてそれを自覚し、ため息を吐いた。

だが、春奈は円堂の落ち込みを自分の不甲斐なさと捉えてしまい、申し訳なさそうに目を伏せる。

「すいません、昔ほど情報を集められなくて。今の私はあの子達や円堂さんの役に立ててませんよね。こんな私が雷門サッカー部に居る意味なんて無いんじゃない?」

「そんな事はない!」

自虐的な春奈の言葉を、円堂は力強く否定した。

「いいか、春奈。お前がサッカー部のマネージャーになってくれたのは、お前は情報収集能力に長けていたからか?」

「違う! 最初の帝国との試合で俺達のサッカーを見て、サッカーを好きになってくれたからだよ!」

「……っ!」

「お前がサッカー部に来てくれた時、俺達スツゲー嬉しかったんだぜ!」

俺達のサッカーを見てくれている人がいるんだって、ファンになってくれた人がいるんだって!

俺達はお前が持って来てくれる情報を有り難いと思った事はあるけど、情報収集が出来ないと居る意味が無いなんて思った事はない!」

「円堂さん……」

「俺達にとつちや、春奈が雷門サッカー部に居てくれることに意味があつたんだ。秋も夏末も冬つぺも同じさ！」

自信を持ってよ。音無春奈は今の雷門中サッカー部に必要なんだ。雷門のサッカーを最後まで信じてやれる音無春奈が！」

つー…と音無の頬を温かいモノが流れ落ちる。もう枯れたと思つていた涙腺から溢れ出したモノが。

春奈は雷門サッカー部を見守りたいと思ひ、教員として雷門に戻つて来た。そして念願のサッカー部の顧問となる事も出来たのだが、そこで彼女を待つていたのはフィフスセクターによる管理サッカーと心を摩耗した子供達。

サッカーの試合結果を演出する為の駒としか子供達を見ていないフィフスセクターの管理サッカー。

自由なサッカーをさせてくれ、と悲痛な叫び声を上げる子供達。

学校上層部やフィフスセクターに抗議の声を上げるも、彼らは私の声を「馬鹿らしい」と鼻で笑つて一蹴した。

私は何の成果も得られず、無力感と罪悪感を募らせる日々を送つた。

幾度も悔し涙を流し、一年が経つ頃には涙が枯れると共に自分が雷門サッカー部に居る意味さえ見失つてしまった。

「ううっ……ぐすっ……」

「……今は泣け。俺も夏末も止めやしないから」

「呼んだかしら？」

「夏末！ちようど良かった……春奈に胸を貸してやってくれないか？」

「ええ、勿論よ。……春奈さん」

「夏末さん！……うわああああん!!」

偶々やって来た夏末が春奈を正面から抱き寄せ、春奈の背中を円堂が摩る。初めは感情を決壊させて大泣きしていたが、時間が経つにつれて段々落ち着きを取り戻していく。

やがて春奈も泣き止み、部屋には再び真面目な空気が戻った。

「ご心配をお掛けしました。円堂さん、理事長」

「ええ、構わなくてよ。落ち着いたのなら、会議の続きを進めて頂戴。円堂君、帝国戦の作戦はあるのかしら?」

「ああ。情報は少ないが、帝国のプレースタイルは規律の取れた多人数での攻守だ。地上を攻め上がるのは厳しいだろうから、高低差を使ったパスを使う。それでも攻めきるのが難しいければ、必殺タクトイクス【アルティメットサンダー】でゴール前にボールを運ぶと同時にスペースを作る」

「肝心の得点力はどうするのかしら?」

うちのチームにそんな決定力のある選手がいる様には思えないわ。強いて言うなら三国君だけど、彼はゴールキーパーなのでしよう?」

「そこなんですよねえ……剣城君以外にも【化身】を出せる子がいれば、話は変わるんでしょうけど」

「いいや。俺も使えるから分かるが、【化身】は大きくスタミナを消費する。強い力を持っている分、頼り切ったプレーをするのは危険だ。

いざという時の為に覚醒だけはさせておきたいが、それとは別に今までの雷門に無いワンプレーを修得する必要がある」

「つまり、新しい必殺技を身につけさせるといふ事ね。けれど、いずれにしても生半可な指導じゃ難しくくてよ?」

「ああ。だから今回は、必殺技も【化身】も俺が面倒を見る」

「え!それじゃあ、他の皆はどうするんです?」

円堂さん無しで練習なんて……」

「出来るさ。雷門サッカー部の指導者は俺だけじゃないからな。だから、春奈——」

円堂は言葉を区切り、春奈と夏未をジッと見据える。

「暫くの間、サッカー部のコーチを任せる!」

夏未、出来る限りフオローしてやってくれないか?」

「……え? ええええええ!」

「あら、誰にもものを言っているのかしら。出来る限りと言わず、全面的にバックアップしてみせるわよ」

「な、夏未さんまで!」

「音無先生、貴方はしばらくサッカーに集中すること。これは理事長としての言葉です。運営体制を改革してから業務も随分と圧縮されたと思うけど、どうかしら？」

「えっ、それは大丈夫だと思いますけど……サッカーをするのなんて大学以来ですし、真つ当な指導なんて出来るかどうか……」

「それなら心配いらないわ。これから毎日、貴方は私のチームのグラウンドで私達と特訓するもの。勿論、送迎はこちらで担当するわ。自分のサッカーに磨きをかけつつ、指導も学ぶのよ。一石二鳥でなくて？」

円堂と夏末の言葉には厚みがあった。二人とも、春奈なら出来ると思っていて疑っていないからだ。それは言葉にされずとも、春奈のハートにイナズマとなって走り抜ける。

春奈の中にあつた無力感や自己否定などと言つた重くのしかかる何かが春の雪解けの様に消えていき、露わとなった大地から芽が出る様に春奈のサッカーへの情熱と信念が顔を出した。

もう、音無春奈を遮るものは無い。

「お願い……します、夏末さん！」

「そう来てくれると思つたわ。試合の翌日だから今日はサッカー部も休みよね？」

「ああ、皆サッカーが大好きだから集まって来るけどな。俺が見ておくから大丈夫だ、帝国戦に向けての練習は明日からやる。安心して行って来い！」

「結構です、じゃあ早速行くわよ。必要なものは向こうで用意するから安心して良くてよ？」

「はい……」

その後、春奈は久しぶりの練習の負荷に耐えられず、3回ほど吐くことになる。

更に、練習に身体が慣れきるまで、春奈は練習後にグロッキー状態となつて帰れなくなる日々を送ることになる。雷門家に寝泊まりし、通勤には夏末専用のリムジンに相乗りする姿が目撃されたと言う。

??????

「皆、今日の練習はここまでよー!」

『ありがとうございます!』

どうも、三国太一です。遂にホーリーロード地区大会準決勝まで残り3日となった。

ここ暫くは、円堂監督ではなく音無先生が俺達の練習を監督してくれている。しかもジャージとスパイクに着替えて練習に混ざるなどと、以外にもアグレッシブな一面を発揮してくれている。

天才ゲームメーカー鬼道の妹である音無先生は、そこらの指導者よりもサッカーに精通している。それは指導やプレーを見てれば分かるし、何よりもサッカーに掛ける情熱から伝わって来る。最近はずれも上手くなって来た……というより、元々鈍っていた感覚を取り戻している感じか？

少なくとも、「スピニングカット」とか「イリュージョンボール」とか普通のサッカー部顧問が使って良い技じゃない。発動パートナーになれる人間が居れば「デスゾーン2」とかも披露してくれたのだろうか？

ホーリーロードが終わったら教えてくれるとは言っていたが、一体何がどうなっているんだ？

最近は顔色も悪いし、心配だ。……つと、そうそう。心配と言えばもう一つ心配の種があったっけ。

「サッカー棟組はどうなったかな？」

俺達とは別に円堂監督に呼ばれたメンバーがいる。フォワード組に加えて神童と天馬だ。彼らはサッカー棟の中で円堂監督と別メニューの特訓をやっているらしい。

呼ばれたメンバーからして何をやらせようとしてるかは想像に難くない。彼らを別の場所で練習させているのも、出来るだけ外部からの刺激をシャットアウトする為だろう。ほぼ間違いなく、連携必殺技の修得と【化身】を出す練習だ。

円堂監督はサッカーに関して宇宙一のサッカー馬鹿の称号が付

くほどのバカ真面目さと意外性を併せ持つ。オールウエイズ1000
点の練習メニューを提供しているに間違いはない。

南沢と倉間は二人ともパワー不足だが連携に安定感がある。個人の
パワーで駄目なら力の掛け合わせを試そうとしているといったと
ころか？

天馬と神童に関しては「化身」ではほぼ確定と言ってもいいだろう。
彼らは既に兆しを見せている。後は刺激や覚悟といった、心の成長が
伴えば顕現に至るはずだ。円堂監督は、自分の化身と呼応させて揺さ
ぶりを掛ける事で起爆剤になろうとしているのだろう。

「化身」か。なんで俺には出せないんだ？」

俺は今まで化身を出せたことがない。

だからこそ誰よりも体を鍛え、誰よりも基礎的なサッカープレー
ヤーとしての力を鍛え上げて来た。とは言え、ホーリーロードの先
にある戦いまで勝ち抜くためには化身の力が欲しい。単純に化身が
カッコいいからってのもあるけども。

「……まあ、ウンともスンとも言わない力を欲しがっても仕方がない。
いつもの基礎トレに——」

「あの、三国先輩！ 自主練をしたいんですけど、付き合って貰えませ
んか？」

「うん、いいよ」

「やった！お願いします！」

さっさとトレニングルームに入って筋トレでもしようかと考え
ていたところへ、影山がサッカーボールを持って声をかけて来た。

彼はこのところ力を伸ばして来ている選手だ。入部してから半月
と経っていないにも拘らず吸収が早く、成長の幅も大きい。基礎的な
プレーは一通り形になって来ている。ここからが大事なところだ。

俺の目標は最高のサッカー選手だが、後輩の伸び代を潰してまで自
分が強くなろうとは思わない。強くなりたいと願う正しい人間に手
を差し伸べてこそ最高の最高だ。

??????

「もう一度だ。合わせろ、倉間！」

「はい、南沢さん！」

「【イナズマー号】!!」

倉間と南沢が同時に放ったツインシュートは蒼い雷を纏いながら無人のゴールネットに突き刺さる。威力、スピード、コントロール全てが完璧であり、【ソニックショット】や【サイドワインダー】よりも強い。

久しく感じられていなかった成長への達成感が胸を満たしていく。南沢と倉間はニヤリと笑みを浮かべ、グータッチを交わした。

そのセンターラインを挟んでフィールド反対側のゴール前では、円堂を相手に神童と天馬がシュート練習をしていた。

10本を1セットとして9本はノーマルシュートや必殺技、残りの一本を化身で撃てれば成功なのだが、その数が累計10000本を超えて尚、彼らには未だ成功の気配がない。

「今だー出してみろー」

「うおおお……!!」

「はあああ……!!」

円堂が気を集中させると、背後から影が溢れ出す。影はやがてヒトの形を成し、闇を切り裂いて偉大なる魔神が姿を現した。

「【魔神グレイト】!!」

神童は追い詰められてはいなかった。先輩方もチームメイトも革命には積極的であり、安心して背中を預けられる存在がいる。故に、彼に足りなかったのは心の試練。

極限の疲労と絶対的な壁の前に、彼はサッカープレイヤーとしての自分の矜持を思い出す。誰よりも前に立ち、ゲームメイカーとしてチームを引っ張って行く、その覚悟を。

それが神童を一段階上のステージまで引き上げた。彼の背後から影が溢れ出し、四本の腕を持つ指揮者が闇を切り裂いて姿を現す。

「【奏者マエストロ】!!」

松風天馬は心が躍っていた。入学式初日から雷門の一軍を圧倒する程の強さを持つサッカーチームを相手に無失点で抑えた力強い守

護神に、荘厳かつ繊細な指揮とプレーでチームを牽引するキャプテン、彼らと共にサッカープレイヤーとして成長して来た雷門イレブン。

そんな彼らと肩を並べて戦って行ける。戦いを制した先で、日本一という一つの頂上からの景色を見る事が出来る。

だから、自分のサッカーと正面から向き合いたい。自分のサッカーに対する答えを持って前に進みたい。

限界寸前の肉体と精神。初めて経験する極限状態の中、天馬はサッカーへの真つ直ぐな想いを再確認し、それに呼応して天馬の中に眠っていた力の結晶が覚醒する。

天馬の背後から影が溢れ出したかと思えば、青白い光を帯びて爆散し、雷雨の嵐を翔ける魔神が顕現した。

「【魔神ペガサス】!!」

「来いっ!」

「【ハーモニクス】!!」

「うおおおおおっ!!」

「おっと、良いシュートだ!!」

神童から放たれた化身必殺シュートと、天馬から放たれた化身の力を乗せたノーマルシュート。

二つのシュートを円堂は化身の力を乗せ、それぞれ片手で受け止めた。

「ハアツ……ハアツ……」

「ぜえっ……ぜえっ……」

「お疲れ!よく頑張ったな!!」

神童と天馬は疲労困憊ゆえに座り込み、激しく息を切らして返事を声に出す余裕もない。

それでも、彼らの顔には心からの笑顔が浮かんでいた。

第10話：革命の裏側／雷帝の戦い

「うっ……」

植物特有の青い匂いが鼻腔をくすぐる。目を醒ました剣城京介の視界に飛び込んできたのはサッカーボールと、ゴールだった。

彼がいる場所は稲妻町の河川敷ではなく何処かのサッカーフィールドの様だが、霧に包まれている為よく見えない。一体、何がどうなっているのか。ここは何処なのか。剣城の口から疑問が出る前に、その答えは示された。

「タイタニックスタジアム。かつてイナズマジャパンが世界一の座に着いた場所だ。ファイブセクターの始まりの地とも言えるだろうな」

剣城の疑問に答えたのは、剣城の背後に立っていた男。褐色の肌に濃い緑色の髪、血のように紅い虹彩。何より目を引くのは、男の服の下から雄弁に存在を主張する盛り上がった筋肉と全身の傷だ。

声色からして、この男が自分を攫った下手人で間違いないだろう。しかも、パツと目につく特徴からだけでも、今の自分より遥かに強いと判断出来る。剣城は自分が追い詰められている事を悟り、情報を引き出す方向へと思考を切り替えた。

「そうか。それで、お前は誰だ？」

「俺は名も無き小市民。ザナーク・アバロニクだ。」

剣城京介、貴様には今から俺達とサッカーをして貰う。おっと、その前にユニフォームとスパイクをサービスしてやろう」

ザナークが指を弾くと、剣城の改造学ランが真紅を基調としたユニフォームへと変わり、普段履きが深緑色のスパイクへと変わって行く。驚いて感触を確かめるも、どうやら本物らしい。

「これで準備は整ったな。ついて来い」

有無を言わせぬ態度とザナークと自分の力量差、剣城に選択肢は残されていないかった。ピッチのセンターラインへと歩いていくザナークの背中を追いながら、剣城は問いを投げかける。

「お前は一体、何を企んでやがる？」

「先刻も言っただろう。お前には俺達とサッカーをして貰う、とな。それ以上でも以下でもない、自惚れるなよ弱者」

やがてセンターサークルの真ん中へと経ったザナークは、次の瞬間仁王立ちになり、「喝ッツ!!」と咆哮を上げる。

次の瞬間、視界を覆っていた深い霧は一瞬にして払われ、いつの間に現れたのか、剣城とザナークの目の前には黒いローブに身を包んだ謎の集団が立っていた。

そして、剣城とザナークの横にも同じユニフォームに身を包んだ奇妙天烈な人間達が立っていた。恐らく、彼らが今回の試合のチームメイトなのだろう。

「フン、そっちの首尾はどうだ?」

「……………」

「当たり前だ、これは貴様が始めた茶番だろう。出来なかったなどと抜かす様であれば、殺していた」

「……………」

「…………相変わらず生意気な奴だ。だが、それも事実だ。さっさとこの茶番を終わらせるぞ」

周囲を観察していた剣城京介の下へとザナークがやって来る。ザナークはローブの男の一人と何やら話をしていた様だが、剣城にその内容を知る由は無かった。

「チーム名はザナーク・ドメインだ。アイツらを呼ぶ時は番号で呼べ、それくらい知能はある」

「俺のポジションは?」

「好きな箇所を選ばせてやる、さっさと配置につけ」

「…………そうかよ」

【ザナーク・ドメインフォーメーション】

剣城 ザナーク

グロクス ゴース ドリス ピート デリエリ

グレイ メラス バロル

エスタロッサ

「ローブの集団フォーメーション」
ローブA ローブB ローブC
ローブD ローブE ローブF ローブG
ローブH ローブI ローブJ
ローブK

何処からともなく鳴り響くホイッスルの音と共に、革命の裏側で一つの試合が始まった。

ザナーク・ドメインのキックオフで始まった試合は、膠着状態が続いた。一人一人の力量で上回るザナーク・ドメインに対し、ローブの集団はコンパクトな陣形で常に複数人でプレーに当たり、上手いことを力を拮抗させていたからだ。

互いに攻め、攻められ、シュートチャンスが生まれる事がないまま、時間だけが過ぎていく。

このまま前半が終わるかと思われたが、前半28分にして試合が動く。

ローブBからボールを奪ったメラスからグレイ、グロクス、ゴース、ドリストとパスが繋がり、ドリスが剣城にスルーパス。剣城はこのボールに追いつき、ペナルティエリアにまで走り込むとヒールリフトでボールを天高く撃ち上げ、身体を捻って跳び上がり、空中でボールを蹴り抜いた。

「デス・ドロップ！」

死の墮落の名を冠する必殺シュートがローブの集団のゴールを襲うが、ローブKは慌てる様子もなく両腕を前に構える。

「ハイ・ビーストフアング」

無機質な声と共にローブKの背後から紅蓮の虎が顕現する。虎は勢い良く前へと飛び出すと、鋭い牙で剣城の必殺シュートに喰らいつき、威力を完全に噛み殺してしまった。

惜しくも剣城のシュートは得点に繋がらず、前半が終了した。

??????

どうも、三国太一です。

現在、俺達は帝国戦を直前に控えている。剣城がないのは少々気になるところだが、円堂監督と音無先生は家庭の事情だと言っていた。どうしようもない事だね、しょうがない。

そもそも、剣城は戦力として優秀だが、今のチームに絶対に必要な選手だとは言えない。そんな奴の不在が原因で負けてしまうのであれば、この先の戦いを制することなど出来ないからね。甘えずに行こう。

【雷門フオーメーション】

南沢	倉間		
浜野	松風	神童	影山
車田	西園	天城	速水
三国			

今日の試合は激しく攻守の入れ替わる試合になる事が予想される為(音無先生談)、足の速さとブロック技に優れる車田と速水をサイドバックに配置し、右サイドのMFに輝君を採用する事にしたらしい。

初試合という事で、かなり気合いが入っている。俺の独断と偏見を基に幾つか必殺技も覚えて貰ったからな、存分に活躍してもらおうじゃないか。

また、ベンチは霧野君である。足の怪我自体は良くなったものの、まだ試合に出られる状態じゃないという事で休養の運びとなった。ピッチの外からでも得られるものはある、ピッチに戻って来た時に力を発揮してくれるだろう。

【帝国フオーメーション】

逸見	御門			
洞沢	佐々鬼	蒲田		
成田	龍崎	飛鳥寺	大瀧	五木
雅野				

試合開始は雷門ボールから。南沢と倉間が前線を引っ張り、MFの4人がFWを押し上げる様にパスを回しながら走る。

DFは西園と天城を守備に残し、サイドの車田と速水が最終DFラインとMFの中間地点を見極めながら慎重に立ち位置を調整している。

帝国の素早い攻守を警戒しつつ、いつでもMFのカバーに入れる位置だ。円堂監督の指示通りだな。

「キリースライド！」

「神童先輩！」

「天馬！」

「サルガッ——」

「そよかぜステップ！」

成田のスライディングが直撃する前に神童は天馬へとパスを出し、天馬の行手を阻む様に龍崎と大瀧が円を描いて包囲するも、天馬は二人の隙間を縫う様に軽快なステップを踏んで突破してみせた。

凄えな天馬。めっちゃ進化してるじゃん。

「こっちこっち！」

「浜野先輩！」

後方から蒲田、前方から飛鳥寺と五木が天馬へと迫るが、浜野の声に応えた天馬がパス。柔らかなタッチでボールを受け取った浜野は軽快なドリブルでサイドを駆け上がって行き、走り切ったところで帝国ペナルティエリア内へとセンターリングを上げた。

「南沢さん！」「行くぞ、倉間！」

「イナズマー号！！」

「パワースパイク！！」

センターリングされたボールに追いついた南沢と倉間は、左右対称の軌道を描いてツインシュートを放つ。ボールにイナズマの如きエネルギーが充填され、蒼雷を纏ったシュートが正面から帝国ゴールを襲う。

雅野はこのシュートに対応し、必殺技を以て迎え撃つが、明らかに

パワー負けしている。暫くの拮抗の後、雅野の「パワースパイク」を破ってボールが帝国ゴールへと突き刺さった。

『ゴール！前半3分、雷門が先制点を挙げました！』

私は夢でも見ているのでしょうか!?

この目で直接「イナズマー号」が見られるとは!

我らがヒーロー『イナズマイレブン』が帰ってきました! 私は今、猛烈に感動しています!』

?????

「実に粋な事をしてくれるじゃないか」

「ああ、流石は円堂と春奈が監督する雷門だ」

「鬼道……お前、口元が緩んでいるぞ?」

「当然だ。監督としてチームを率いて、これほど強いチームと戦う機会など滅多に無いからな」

嘘をつけ、と佐久間は内心毒づいた

お前は親友と妹と戦えるのが嬉しいだけだろう、という喉元まで出かかった言葉を飲み込み、佐久間も鬼道と同じ様にニヤリと口元に笑みを浮かべた。

「……そうだな。それで、次はどうする?」

「フツ、全力で掛かるとしよう。」

……総員! オペレーションαー!」

「やっと指令が出たか!」

「総員、オペレーションαーだ!」

「ここからが本番だぜ!」

「地獄のシヨアの始まりだ……!」

「だが鬼道、目的は忘れるなよ?」

「分かっているさ。なに、今の雷門はこの程度で潰れる様なチームじゃない。それは俺もお前も分かっている筈だろう?」

「ああ。彼等は『イナズマイレブン』だからな」

鬼道に釘を刺す傍ら、佐久間も気合いを入れた。例え今日、この後どうなろうと雷門は帝国を打ち倒して前に進むだろう。

雷門に勝つのは、自由にサッカーが出来る様になった後でいい。今

は自分達も軌跡を共にした黄色いイナズママークに信頼を置くとしてしよう。

佐久間と鬼道は、注意をピッチの中へと戻した。

????? それからの試合展開は凄まじいものとなった。

帝国の鬼道監督が凄まじい早さで指示を出し、帝国の選手達は選手なりの最大限を以て応える。

雷門イレブンは神童の指示を中心に地力の強さと硬い結束でボール奪取に当たり、攻め込んでいく。

「ソニックショット！」

「フルパワーシールド！」

「チツ、これでも決まらねえのか！」

「このゴール、二度と破らせない！」

南沢と雅野のやり取りを最後に、主審のホイッスルが前半終了を告げた。雷門イレブんと帝国イレブンは共にそれぞれのベンチへと戻って行くのだが、雷門の足取りは軽く、帝国の足取りは重い。

そして帝国の重い雰囲気は紛れ、潜り込んだ4人の間者の思惑が交錯し、暗所にて本性を曝け出す。

「……拙いな」

「ああ、どうする御門？」

「龍崎、飛鳥寺。お前らは後半、MFの位置に上がって来い。鬼道の指示よりも……」

「ああ、ファイフスセクターの任務を遂行する」

気味の悪い笑みを浮かべ、彼らは再び帝国イレブンの皮を被って帝国の中へと戻って行く。してやったり、と思った事だろう。

「……鬼道」

「いや、泳がせておこう。その方がスムーズだ」

普段は眼帯で封じられている暗所を見通す眼と、ボールの回転数まで見切るゴーグルの下の双眸が自分達を捉えている事など、4人の間者は知る由もなかった。

第11話：革命の裏での覚醒

時は少しばかり遡る。

ここは稲妻総合病院。稲妻町の中で最も規模が大きく、先進的な医療が受けられる場所である。剣城京介を攫った後、ザナーク・アバロニクは一人の男に会うべくこの場所を訪れていた。

「剣城優一、貴様は再びサッカーがやりたいか？」

「……それは、やりたいに決まってる」

その男とは、剣城優一。剣城京介の実の兄にして、12歳の時の事故が原因で下半身不随となってしまった悲劇のストライカーである。

「貴様の知らない事実を教えてやる。貴様の弟、剣城京介は貴様のそんな想いを叶えるべく、サッカー管理組織フィフスセクターに魂を売り、八百長試合の片棒を担がせていた」

「なんだって……!? そ、そんな証拠……」

剣城優一が動揺する中、突如として現れた黒いローブを身に纏った何者かが拘束された人間を放り出す。

それは黒ずくめの格好をした不審者にして、剣城優一は知る由も無い事実だが、先日雷門中にて黒の騎士団と名乗るサッカーチームを率いて雷門イレブンと戦い、敗将となった黒木であった。

「くそっ、離せ！お前達は何者だ！」

我々フィフスセクターに逆らうとは何たるうごあ!？」

「黙れ。敗北者。」

貴様に問う。剣城京介はフィフスセクターのシードであり、お前達は奴の行動の見返りとして、剣城優一が手術を受けるための費用を少しずつ小出しにして提供していた。そうだな？」

「ふん、そんな質問に答え痛だだだ!？」

こ、答える！答えるからやめろ！」

この期に及んでみっともなく抵抗する黒木にザナークは容赦なく蹴りを叩き込み、黒いローブを身に纏った男は一切の慈悲もなく関節技を仕掛ける。裏で頭脳派を気取って暗躍したがる人間に限って、痛

みに弱いモノである。黒木はアツサリと首を縦に振った。

「あ、ああ、違い無い！ 剣城京介は兄の手術代を稼ぐため、シードとして我々に協力していた！」

「間違いないか？」

「全部本当だ！ 分かったなら——」

「貴様は用済みだ。もう暫く寝かせておけ」

「はーなっ、お……」

黒いローブを身に纏った男は黒木を絞め落とし、空いている病床に寝かせて顔に帽子を被せた上、側に「起こさないで下さい。死ぬほど疲れています」と書いた紙まで置いて来た。これで黒木が何を言おうが、ただ疲れて錯乱しただけの人間として処理されることだろう。

「さて、少しばかり場所を変えるぞ」

——ワープモード

いつの間にやらサッカーボール型のデバイスを取り出していたザナークが少し操作をした次の瞬間、無機質なアナウンスと共に剣城優一達は見覚えのない場所にいた。

だが、そんなモノに驚いていられるほど現在の剣城優一の心に余裕があるはずもなく、剣城優一は何事もなかったかのように車椅子の上で頭を抱え込んでいた。

「京介が、そんな……馬鹿な……」

「なるほど、貴様の考えている事は読める。」

だが、それは筋違いというもの。全ては貴様という弱者が歩む道の過程に過ぎず、自惚れるのも卑屈になるのも早計だ。鬱陶しい」

「よ、容赦ないな……それで、俺にどうしろと？」

「簡単な事だ、剣城優一。ここに貴様がサッカーの出来る肉体に戻る方法がある」

そう言つてザナークが差し出したのは、少し変わったペンダントだった。先端には紫色の宝石が妖しく輝き、人を惹きつけて離さないような何かを内から外へと放出している様だ。

「……ペンダントの様だが、それがどうしたって言うんだ？」

「ほう、取り憑かれぬ程度の強さはあるか。」

これは「エイリア石」と呼ばれるシロモノだ。所持する人間の思念に反応し、所持者の肉体と精神に変化を引き起こす。

かつて、強くなりたいと望んだ者は実力に見合わぬ力を手に入れたが、力と目的に取り憑かれるようになった。

そう、かつてのエイリア学園の様にな」

剣城優一の顔が険しくなる。彼は18歳、当時のエイリア学園の事件についてもリアルタイムで体験した人間である。例として出されたその名に良い印象などあろう筈もない。

だが……、とザナークは続ける。

「だが、このエイリア石の真価は別に在る。

重要なのは力を手に入れ、そして破壊された後だ。エイリア石が破壊された後、エイリア石によって齎された影響は、使用者の健常なる器に見合った形となって残るのだ。

つまり――」

「俺が使えば怪我が治る。そう言いたいのか？」

「理解が早いな。さて、使う決心は着いたか？」

「……………」

瞑目する剣城優一の脳裏に浮かぶのは、目の前の男に対する信頼の可否だった。先程から何度も超常現象を引き起こし、あまつさえ自分ですら知りもしなかった弟の情報を持つてくる様な謎の存在。そんなものを直ぐに信用して良いものかとの疑問が過る。

だが、弟の顔が思い浮かんだ時、それら全ては形を変える。剣城優一の記憶にある剣城京介は、自分と一緒にボールを追いかける、サッカーを愛する少年だった筈だ。

そんな弟が、サッカーへの冒険を体現した様な機関に身売りしている。その原因は自分だ。自分が不甲斐なく、弱いからこうなっている。弱い自分が憎い。自分に対する怒りが燃え上がり、全ての理性を焼き尽くす。

疑問だとか、全部が嘘だとか。それら全てを無視してでも、目の前にある方法を使う他に選択肢はない。迷いを捨てた剣城優一は、ザナークの手からエイリア石のペンダントをひったくった。

次の瞬間、剣城優一は苦悶の声を上げる。身体の内外を紫電の軌跡を描きながらエネルギーが走り抜け、肉体を構成する骨や神経の並びが強制的に矯正され、足りない部分を補った上で更に強化するべく細胞分裂が凄まじい速度で行われる。

「……ッ!!…これほどか……ッ!!」

やがてエネルギーの奔流が収束すると、爆発の起こった中心地には全身から禍々しいオーラを立ち昇らせる剣城優一が立っていた。

剣城優一の変化を見たザナークの顔に、戦闘狂的な笑みが浮かぶ。

「……」
「ああ。貴様の言う通り、素晴らしい力だ。

おっと、貴様は手を出すな。貴様が誘導し、俺様が戦う。これはそういう協定だろう?」

黒いローブを纏った男にそう言い残し、ザナーク・アバロニクは剣城優一との戦闘を開始するべく飛び出して行った。

???????

「剣城京介よ、この試合はどうだ?」

前半が終了したハーftime、ゲータレードを飲む剣城へとザナークが声を疑問を投げかける。

剣城は考える素振りを見せた後、被りを振った。

「普通だ……普通のサッカー、面白くも何ともねえ」

「ああ、そうだろうとも。今の貴様ではそう答えるだろうな……貴様がサッカーをするのは、怪我をしてサッカーが出来なくなった兄への贖罪だと聞いている。俺様に言わせれば、実に下らん理由だ」

その言葉を聞いた剣城は鋭くザナークを睨みつけたが、ザナークは不敵な笑みを浮かべたまま強大なプレッシャーを放つことで応える。

忌々しげに舌打ちを一つ繰り返し、剣城は吐き捨てるように言った。

「何とでも言え。兄さんからサッカーを奪った俺に、サッカーを楽しむ資格なんざ無えに決まってるんだろ」

「ほう、それは随分と奇妙な言い分だ。貴様の兄がサッカーを出来なくなつた理由は怪我なのだろうか？」

兄弟と言えど、所詮は他人。貴様が狙つて怪我を負わせた訳でも無ければ、貴様が責任を感じる必要など何処にある」

「……何が言いたい？」

劍城の眉間に皺が寄る。しかし、ザナークがその煽りを止めることはない。

「貴様の兄が怪我をした原因は、貴様の兄が弱かつたからに他ならない。その程度の事にすら気付かず、自分に罰を与えているつもりも貴様も同様だ。弱者らしい、実に愚かな理屈よ」

「……黙れ」

「いいや、この際だ。この場ではつきり言つてやろう。お前とお前の兄は所詮、己の弱さに胡座をかいた——」

言葉を切つたザナークは表情を歪ませ、悪意に満ちた笑みを浮かべた。

「敗北者に他ならない」

「ぶっ潰す!!」

怒りが頂点に達した劍城は自身の身体から化身【劍聖ランスロット】を顕現させ、ザナーク目掛けて化身の剣を振り下ろした。

生身の人間の何倍もの巨体を持つ化身から繰り出される剣の一撃は、大きく、分厚く、重さを感じさせる。当たれば無事では済まないであろう威力を以つて、ザナークへと迫る。

だが、劍城の一撃がザナークに届く直前。横からその一撃に割つて入る存在があつた。

ドラゴンの如き翼と角を生やし、黒を基調とする鎧を纏つた戦士が、右手に持った剣で【劍聖ランスロット】の一撃を喰い止めていた。

次の瞬間、戦士は容易く右手に持った剣で【劍聖ランスロット】の剣をかち上げたかと思えば、ガラ空きになつた【劍聖ランスロット】の胴へと空いている左手で拳を叩き込み、一撃で【劍聖ランスロット】を消滅させてしまう。

「落ち着けよ、京介」

「……ッ!？」

化身を消滅させられた剣城は凄まじい力を受け、吹き飛ばされてゴロゴロとフィールドの上を転がる。それでも怒りが収まらず、再びザナークに攻撃を仕掛けるべく剣城は体勢を立て直そうとしていた。

しかし、剣城の行動が次に移る事はなかった。剣城の肩を叩き、優しく声を掛け、真正面から手を差し伸べる存在があったからだ。

その声を聞いた瞬間、剣城から放たれていた荒々しい空気が一転して穏やかなモノとなる。

「に、兄……さん?」

「久しぶりだな。ほら、立てるか?」

「あ、ああ……」

困惑しながらも、剣城京介は差し出された手……兄・剣城優一の手を取って立ち上がる。

掌を握られる感覚が鮮明に伝わる。

夢などではない。松葉杖を使う事なく自分の足で地に立ち、入院着を身につけ痩せ細った姿からは程遠い、ユニフォームに身を包みサッカー選手として肉体を作り上げた剣城優一が、目の前には立っていた。

「なんでここに……怪我はもういいのか!？」

それに、どうしてサッカーを……」

「言った筈だ、俺はサッカーを諦めないって。それよりも京介……」

次の瞬間、優一は京介の顔面を平手打ちした。皮膚が皮膚を打つ乾いた音が響き、頬を走る痛みに京介は呆然とする。

「俺がいつ、お前に足を治して欲しいと頼んだ?」

俺は一回でも、俺達の好きだったサッカーを裏切ってまで、フィフスセクターから金を貰ってくれとお前に頼んだか?」

「で、でも兄さん……」

「言い訳は聞かない。俺達のサッカーを裏切ってまで、フィフスセクターに協力した事を俺は許さない。だから……」

言葉を切った優一は、ザナークへと顔を向ける。

「この試合、俺と一緒にサッカーをして貰う。俺達のサッカーをお前

に思い出させてやる。ザナーク、それでいいな？」

「フン、構わん。ベンチには俺様が下がるとしよう。だが、下らぬ戦いを見せる様であれば容赦なく貴様らを破壊する。良いな？」

「俺は構わないよ、京介？」

「……ああ、分かった」

【ザナーク・ドメイン選手交代】

FW ザナーク ↓ FW 剣城優一

フォーメーションは変わらず3―5―2、対戦相手であるローブの集団も特に変わったところはなく、ローブの集団によるキックオフで後半が始まった。

ローブの一人がパスを受け、攻め上がろうとするが……

「貫つたよ」

すれ違いざまに卓越したボール捌きで優一がボールを奪い、圧倒的な走力を見せつけながら攻め上がっていく。

「【かーごめ、かご……】」

【「スプリントワープ！」】

それを見たローブの集団は多人数で優一を囲いに来るが、優一は止まらない。短距離での加速を繰り返し、ボールを奪いに来る隙を与えずに攻め上がり続ける。幾人もの囲いを潜り抜け、あつという間に最終ディフェンスラインを突破し、ペナルティエリアへと足を踏み入れた。

そして優一は、ボールに右脚で、次いで左脚で蹴りを叩き込んだ。気を注ぎ込まれたボールは上空へと螺旋状に伸びて槍と化し、優一が挙げていた右手を振り下ろすや否や、千本の矢となってゴールを強襲する。

【「サウザンドアロー」!!】

「……いー 凄いや、これが兄さんの必殺シュート……これなら！」

【「ハイビーストフアング」G2】

しかし、剣城の期待は儂く砕け散った。ローブを纏ったゴールキーパーは千本の矢の中からボールが入っているただ一本の矢を見切り、紅蓮の虎が顔面中に矢を受けながらも致命的な一撃を喰らい潰す。

さながら、圧倒的な力を見せつけるかの如く。威風堂々とした佇まいは、黒のローブと相まって不気味な存在感を醸し出していた。

「そんな、兄さんのシユートを……」

「いいや、分かっていた事さ。切り替えるぞ、ゴールキックだ」

「信じられないモノを見た」という顔をする京介を伴い、優一はディフェンスに参加するべく走り出す。

ゴールキーパーは「向こうへ行け」とジェスチャーサインを出し、ボールを思い切り蹴り飛ばした。

ボールはみるみる飛距離を伸ばし、センターライン付近で待ち構えていたローブの一人の足下へと収まる。

「いいか、京介。俺達は二人とも、あのキーパーから一人でゴールを奪うことは出来ない」

「いいや、兄さんが化身を使えば……」

「そう、そこだ。今のお前は化身に頼り過ぎている。

化身は確かに強いけど、その強さに甘えちゃいけない。いざという時に自分のプレースタイルを底上げしてくれるだけの存在として扱うべきなんだ」

「それなら、今がその時なんじゃ……」

「いいや、違うさ」

注意をフィールドの中で行われている試合から逸らすことなく、優一は京介の言葉を否定する。

「言っただろう、京介。『お前には俺達のサッカーを思い出して貰う』って。今のお前は俺が、或いはお前が一人でシユートを決める事に拘っているんじゃないか？」

「……!!」

「俺もお前も豪炎寺さんに憧れたから、その考えは分かる。絶対的なエースストライカーは一人でも点を決められる、攻撃の基点として試合の流れを動かしてしまう。」

「だけど、『いつも一人で得点を挙げる訳じゃない』だろうか？」

「つまり、兄さんが言いたいのは――」

優一の言葉を聞き、京介の中で何かが崩れ去る音がした。それは剣

城京介を縛っていた鎖か、或いはフィフスセクターの訓練を通じて築き上げてきたハリボテか。

『仲間とサッカーをしろ』って事だね?」

「そうだ。力を合わせてゴールを獲りに行くぞ、京介!」

「ああ、兄さん!!」

京介の胸に、金色に輝くイナズマ魂が宿る。

優一と京介は走り出し、相変わらずボールの奪い合いをしているローブの集団とザナーク・ドメインによる混戦地帯の中心地へと突撃する。

先に到達したのは優一だった。元から混戦状態だった場所に、剣城優一という強力なプレイヤーの出現。いかに連携による人数有利を取りながら立ち回っているとは言え、これを無視できる筈もなく、より多くの注意力が優一へと向けられる。

故に、ボールを持っていたプレイヤーはパスを出してしまう。思考のオーバーフローを避けるために行われるソレは、人間が避けては通れない行動といえよう。

だからこそ、そこに甘さが生じる。

「ここだッ!」

「攻め上がるぞ、京介!」

京介がパスをカットし、トップスピードに乗ったまま身を反転。再びゴールを目指して走り出す。

その行動を見越していた優一は既に走り出しており、京介のプレースピードに遅れる事なく着いて行くことが出来ている。

ディフェンスラインに残っていたローブの選手達を兄弟による連携でアツサリと突破し、京介と優一はペナルティエリアへと侵入した。

「京介!今こそあの必殺技だ!」

「……!! わかった!!」

次の瞬間、京介はボールを天高く打ち上げ、身体を捻る構えを取る。

一方で優一も京介と左右対称に構えを取り、二人は全く同時に炎の軌跡を纏いながら天高く跳び上がる。

予行演習のない本番一発勝負、技の練度も理解度も圧倒的に足りない。

それでも、兄弟の才能とサッカーを愛する心に抛る努力、優一によるフオローと互いに信頼し合う兄弟の絆が合わさる事で、それは一つの技として実を結ぶ。

「『ファイアトルネード D ダブルドライブ D』!!」

「『ハイビーストフアング』 G2」

「『行け!!』」

「……見事なり」

兄弟の繰り出した炎の渦は紅蓮の虎の牙と拮抗を見せるも、やがて虎そのものを焼き尽くし、ゴールネットに突き刺さった。

「や……やった……のか?」

「ああ。やったぞ、京介!」

「……ーッ!!」

既に枯れたと思っていた、ゴールを決めた時の喜び。間欠泉のように溢れ出す感情が京介を満たしていく。収まり切らない喜びは温もりとなって、頬を伝い流れ落ちる。

「兄さん、ごめん……!俺……今まで、兄さんからサッカーを……ファイフスセクターにも……俺達のサッカーを裏切って……ごめん……!!」

ひたすら謝罪の言葉を口にする京介。

優一はそんな京介に胸を貸し、兄として弟の涙を全て受け止めた。自分には、弟の道を誤らせてしまった責任がある。

病院のベッドの上では「自分がサッカーをやりたい」という事しか考えられなかったが、今ならそれが弟にとってどれほどの重圧になっていたのかが分かる。

それでも、京介は自分とのサッカーを思い出してくれた。自分の言葉を聞いてくれた。だから、兄として自分も謝らなければならない。「京介、俺こそ……お前の苦しみにも気付かず、俺はずっと『またサッカーをやりたい』としか考えられちゃいなかった。」

さつきは『俺達のサッカーを思い出して貰う』なんて言ったけど、どんな面を下げて説教してんだ、って話だ。

だから、俺からも言わせてくれ。ごめん……」

この日、兄弟は和解を果たした。

6年にも渡って兄弟を苦しめた枷は破壊され、兄弟はあれこれと語り合う。そんな場面が普通であれば待つている。

「試合は終わりだ」

だが、そんな場面にも我関せずと遠慮なく踏み込み、悉く自我を通すのがザナーク・アバロニクという男だ。ベンチから立ち上がったザナークは自身のデュプリを消滅させ、兄弟の和解の狭間に容赦なく割って入った。

「ザナーク、一体何を」

「剣城京介。雷門イレブンは帝国学園にてホーリーロード準決勝の試合を行っている最中だ。後半は既に始まっている、40秒で支度しろ」

それだけ言い残すと、ザナークは再び何処からかサッカーボール型のデバイスを取り出した。

一方、剣城京介は躊躇っていた。これまでファイフスセクターのシードとして雷門イレブんと正しくコミュニケーションを取って来なかった自分に彼らと肩を並べて戦う事が出来る訳がない、そう思っていたからだ。

「……俺は——」

「京介」

「な、なんだい、兄さん？」

「お前の考えている事は分かっている。」

俺が彼らに全てを話して謝っておく。俺が全ての責任を引き受ければいい。それでお前は大丈夫だ。それでも駄目ならまた次の手を考えるさ。

それで問題ないだろうか？」

兄として弟の悩みを見抜いた優一の言葉を聞き、剣城京介は瞑目する。暫しの沈黙の後、目を見開いた。

「……ザナーク。準備が出来た、頼む」

「良いだろう。では、さらばだ」

——ワープモード

無機質な音声の直後、剣城兄弟は見覚えのない通路にいた。一方からは光が差し、声援とホイッスルの音が聞こえる。どうやらここは帝国学園スタジアムの様だ。

「さあ、行こう。京介」

「いや、兄さんはここまででいい。ここから先は俺一人で十分だ」

「そういう訳にはいかない。責任は——」

「違うんだ、誰に責任があるとかじゃない。俺は一人のサッカープレイヤーとして雷門サッカー部というチームと真摯に向き合う必要があるんだ。」

頼む、兄さん。一人で行かせてくれ」

京介の言葉を聞き、優一は考えを巡らす。

弟がやろうとしている事は、人間として正しい。

だが、兄として、弟に全ての責任を負わせる訳にはいかない。

なにより、純粹にサッカーをする以外の目的でサッカーを強要させる事など、弟にさせてはならない。それでは、フェイスセクターのシードとやっている事が変わらないじゃないか……!!

下りた暫くの沈黙の中、思考を巡らせた後に優一は漸く口を開いた。

「……1つだけ聞かせてくれ、京介。」

この先、お前が彼らとサッカーをしたいと思う理由はなんだ？」

質問の内容が予想外だったのか、京介は僅かに目を見開き、眉尻を下げて柔らかな笑みを浮かべた。

「……取り戻したいからだ。ずっと兄さんとやりたかった、本当のサッカーを。」

だから、俺と同じ思いで戦っている雷門サッカー部を、俺は助けたい。力になりたいんだ」

「……！ ははっ、そうか！」

二度と叶わないと思っていた、兄とのサッカー。兄との必殺技。自分を縛っていたもの全てから解放され、剣城京介は本当の意味でサッカープレイヤーとなった。

それを理解した剣城優一は――

「行ってこい、京介。観客席から見守ってるぞ」

「ああ。ありがとう、兄さん。」

「……行ってくる!」

弟の決断を尊重することにした。

やがて弟の姿は光の差す外へと消え、暗い通路には優一だけが残される事になった。

「いつまでも守られるだけの弟じゃない、か……大きくなったな、京介」

胸の奥でスパークするイナズマ魂を抱えながら、剣城優一も決意を新たに自らも光の差す観客席へと足を進めていく。

「俺はまたサツカーをやるぞ。ずっと先で、お前と同じピッチに立つその日を待つ。今度は俺が……!!」

??????

「よう、お疲れさん!」

無人となったタイタニックスタジアムで、仕事を終えたザナークへと、黒いローブを纏った男が陽気な口調で話しかける。

「……貴様、良い加減にその暑苦しいローブを脱いだらどうだ?」

「いや、意外と涼しいよ?」

流石は未来の素材だね。亜熱帯性気候のライオコット島のサツカースタジアムだつーのに、エアコンの効いた部屋にいるみたいで快適だぜ」

「中身でなく、見掛けの話だ!」

「……まあいい。それで、話を聞かせろ」

「……なぜ剣城優一を選んだか、だっけ?」

まあ単純な話さ。エイリア石は単品じゃ仕事をしない、依代となる人間がいて初めてその真価を発揮する。ここまではいいね?」

「ああ。続けろ」

「と言っても、元々が弱い人間に使ったところでその強化幅は高が知

れているし、俺やお前じや精神エネルギーが強すぎてエイリア石の方が砕けちまう。

だから、元々は強いけど一時的に精神力が弱体化している人間に使う必要があったのさ。

そこで目をつけたのが、セカンドステージチルドレンのご先祖……その血縁者という訳だ。ほら、彼らなら強い精神エネルギーを持ってそうじゃん？

それでまあ、そんな人間を片っ端から探して行ったところ、メイアの先祖である剣城京介……その兄貴、剣城優一が当てはまった。それだけの話だよ」

「なるほど、合点が行った」

「実際、どうだったよ？

俺はお前が仕留めた後のリハビリしか担当してないから分からないけどさ、強かったんじゃない？」

「……まあまあ、だったな。」

だが、俺の望む最強とは程遠い」

「……そっか。となると、人間じや無理だね。」

かと言って、俺たち以上に強い生物なんて地球上には存在しないだろうし、記録にある宇宙人は全員殴り倒したしな……

そうだな、次は自然現象に絞って探してみるか？」

「悪くない、早速出発するぞ……ブローリー」

「え、もう!?! しょうがねーな……」

黒いローブを外した男……まだ幼さの残る少年の顔は、三国太一にそっくりだった。

第12話：甦るイナズマ伝説

押忍、オラ三国太一！

帝国学園との戦いは、久しぶりに歯応えのある勝負となっている。帝国としては雷門の壁となると同時に成長を促す為のステージギミックに徹するつもりなのだろう。いいね、ボルテージが上がってくるじゃないか。

とは言え、状況的には宜しく無い。このままタイムアップまで粘り勝ちしようとすればさせては貰えるだろうが、それで勝ったところでチームの成長には繋がらない。

そんな消極策でホーリーロードを戦い抜けるのかと言われれば、答えは否だ。俺がアホみたいに強くなったせいで感覚が麻痺しているが、本来、ホーリーロードはかなりの強敵が出揃う大会。「点を決めさせなければ勝てる」などという心積もりで戦っていればあつという間に負けてしまう。それこそ、かつての千羽山中学のように。

忌憚のない見解を述べれば、チームとしてのサッカーという一点では雷門より帝国の方が上だ。鬼道というシンボルの下での統一性というのもあるが、何よりフィジカルや戦術プレーといった基礎力が段違いである。

彼らのプレーや必殺技は、莫大な基礎によって養われる地力と精密な動きからしか生まれない。”キラースライド”や”ジャツジスルー”など、その最たる例だ。相当な練習を積んできたのだろう。

だからこそ、強力な必殺技を習得している筈の雷門イレブンは苦戦を強いられている。

さて……この壁を崩す方法を我がチームの司令塔は分かっているかな？

俺は、チームの中心でゲータレードを飲む神童へと声を掛けた。

「前半が終わって1-0か。さて神童、今の雷門に足りないものってなんだと思う？」

「そうですね……攻撃の要でしょうか？」

「その通り。ぶつちやけ、倉間も南沢も『コイツにボールを渡せば点が取れる!』って雰囲気を持ったストライカーじゃない。柔軟性があると言えは聞こえはいいが、今の雷門は必勝パターンが無いだけだ。」

その上、帝国はチームプレーの完成度も高い。個人の力でもチームの力でも上を取られている以上、奇襲で一点取れただけでも上等。二度と同じ策は通用しないだろうな」

「ええ。俺の指揮も中盤が範囲ですし、簡単にラインを上げさせてくれる相手でもない。前方はどうしてもFW依存になってしまう。だからこそ、単独で得点力の高い選手が前方に必要……という事ですね?」

「分かっているじゃないか。……おっと。どうやら、その最後のピースがやって来たみたいだよ」

「え? ……お、お前は!」

俺が神童君と話していると、通路の奥からゆったりとした足取りで現れる少年が一人。

「……」

その正体は、剣城京介。雷門のユニフォームとスパイクを着用し、身体の至るところに特訓の跡が見られる。少しばかり圧倒されるが、試合に参加しに来た風体と見える。

「来てくれたんだな、剣城!」

「嬉しいよ、剣城!」

天馬と信介と輝の一年生トリオは歓迎ムード、霧野と神童が歓迎気味、浜野と速水は様子見、あと俺を除いて全員が不快って感じかな。

さて、どうする剣城? ……と思っていた次の瞬間、驚くべきことが起こる。

「雷門イレブンの皆さん。」

シードとして貴方達から自由なサッカーを取り上げようとしたこと、本当に申し訳ございませんでした」

様子を見守っていると、いきなり剣城京介が直角に腰を曲げて頭を下げた。しかも、普段の荒々しい口調ではなく、丁寧な言葉遣いで。「ファッ!」

思わず大声を出して皆の目を集めてしまったが、それにしたって驚きだ。キャラ崩壊ってレベルじゃねーぞ。一体どうしたんだ!?

「……………」

「…………おっと、済まない。続けてくれるか?」

「あ、ああ…………」

もしかすると、シードの教育プログラムに礼節に関するトレーニングもあったのかもしれないが…………それは無いか? 俺の知っているシードの連中は軒並み人間性ドブカスだし。

「そして、烏滸がましい事とは思いますが、雷門イレブンの皆様に”劍城京介”という一人のサッカープレイヤーとしての懇願があります!」

…………どうか、俺も一緒に戦わせてくれ! 本当のサッカーを取り戻すために!」

背筋を伸ばし、力の籠った目で雷門イレブンを見据えながら劍城が頼み込んできた。纏う雰囲気も今までの様に触れるものを全て傷つけるような刺々しいハリネズミの様な雰囲気ではなく、真っ直ぐで重厚な力強さを持った肉食獣…………オオカミか? その様な雰囲気が感じられる。

「…………決めるのはチームメイトのお前達だ。さあ、どうする?」

沈黙の降りる雷門イレブンへと、円堂監督から問いが投げかけられる。サッカーをするのは雷門イレブンであり、判断を下すのは当事者たる雷門イレブン自身だと、円堂監督は言いたいのだろう。

自分達で直接チームに係る事柄への判断を下す経験などある筈もなく、雷門イレブンは各々が戸惑っているようだ。

とはいえ、それだけが戸惑いの原因ではない。劍城の情熱は十分に伝わったのだろうが、そもそも、昨日の敵が今日の友になったところで安心して背中を預けられるかは別の話だ。

さあ、どうする…………?

「…………いいぜ、一緒に戦おう」

沈黙は意外なところから破られる。なんと、一番最初に劍城の参戦を認めたのは倉間だった。

「悔しいが、俺じゃアイツらからゴールを奪うのは難しい。お前の得点力が必要だったのは、俺が一番わかっている。お前の力を貸してくれ」

「やれやれ……倉間はこう言うが、どっかのブロッコリーが言ってくれたみてーに、力不足って点じゃ俺も似た様なモンだしな。背番号10番が情けねえ事を言うが、ゴールを決めてくれ。剣城」

「……仕方ねえ。倉間と南沢がこう言ってんだ、俺も認めるぜ」

「車田に賛成だド」

「まあ、そーなつちやいますよねー」

「ハア……心臓に悪いです……」

「決まりだな。改めて宜しく頼む、剣城！」

「ありがとうございます……！」

ドミノ倒しの様に雷門イレブンから承認の声が上がったところで円堂監督が締め、剣城京介の雷門イレブン入りが正式に決定した。

「よし、後半からの作戦を伝えるぞ！——」

「?????」

【選手交代】

【OUT】倉間↓【IN】剣城

剣城が倉間と交代で入り、後半が始まる。

ホイッスルと共に帝国ボールで試合再開し、奴らは速攻を仕掛けて来た。

「はああ……！ 【竜騎士デデイス】！」

龍崎の化身による力尽くの突破を基に、間違はなくシードであろう4人組での連携で雷門イレブンのディフェンスを突破して来る。どうやら捨て身で得点を取りに来る作戦のようだ。

だが、この状況で危機を感じていない奴が俺の他にもう一人いた。剣城である。

『おおっと、これはー!? 雷門の剣城がディフェンスを放棄し、帝国ゴールに向けて走っていきますー！ 一体、どういう事だー!?』

「血迷ったか……決めてやれ、御門！」

「はああ…… 【黒き翼レイブン】!!」

喰らえ！【レイジングクロウ】！！」

実況が困惑しているが、俺には分かる。なるほど、粋なことをしてくれる……思わず口角が吊り上がる。

良いじゃないか剣城……これは俺からのサービスだ！

御門から放たれた化身必殺シュート。それに対し、俺は右手に特大の気を込め、巨大な手の形にして押し出す。

【ゴッドハンド】！！」

「行け！！ 剣城！！」

御門のシュートを難なく止めた俺は、帝国ゴールに向かって走る剣城へとボールをぶん投げる。

超次元の環境で鍛え上げた俺の肉体にとって、200mにも満たないサッカーコート内でのフリースローなんぞ朝飯前だ。ボールはグングンと飛距離を伸ばし、寸分変わらず剣城の胸元へと届く。我ながらナイスコントロールだぜ。

胸トラップでボールを足下に収めた剣城は、電光石火で帝国ゴールへと斬り込んで行く。帝国イレブンは何とかボールを奪還しようと思えば、果敢にディフェンスを仕掛けて行くが、剣城を捉えることが出来ない。

単身ディフェンスを振り払い、ペナルティエリア内に侵入した剣城は帝国キーパー雅野と一対一になるとボールを真上に打ち上げ、螺旋の軌跡を描く炎と共に空中へと跳び上がって行く。

「あれは!?」

「まさか……!!」

「決めろ、剣城!!」

「うおおお！【ファイアトルネード】!!」

「【パワースパイク】!!……な、何だこのパワーはッ!? ぐわあああぁあ！」

そして、爆炎と共に放たれたシュートは雅野の必殺技を粉碎し、雷門に追加点が齎された。

この得点を切っ掛けに、試合の流れは雷門へと大きく傾いた。

シードではない帝国イレブン達は、総帥である鬼道と監督である佐

久間の指示に従おうとするが、シールドの4人がその指示に従う事はない。

結果として帝国の強固なチームプレーには綻びが生じ、帝国イレブンは実質的にその機能を停止。雷門の攻撃に対処できるだけの力を発揮できず、雷門イレブンの勢いを止められない。

「【竜騎士テイ】……ぐっ!」

「今だ!」「はい!」「貰いつ!」

「こ、の……クソがあ!」

「ぐ……ああああ【黒き翼レイヴン】!」

レ、【レイジング】……クロウ【オオオオ!】

「無駄だ」

「なっ、片手だと……!?!」

また、化身の酷使により消耗した御門と龍崎がスタミナ切れを起こしたことで帝国イレブンの攻撃が急激に失速する。

攻防共にガタガタとなったチームを見てもう十分だと判断したのか、鬼道はシールドである4人をベンチへと下げ、控えのメンバーを出して来た。

これにより、帝国イレブンは息を吹き返したように再び強固なチームプレーを発揮するようになり、再び雷門の壁として立ち塞がる。

だが、勢いに乗った雷門イレブンは指数関数的な速度で成長を見せる。帝国による試練の悉くを打ち破り続け、最終的に4対0というスコアで勝利を収めた。

??????

「久しぶりだな、お前達」

「【久遠監督!】!」

そして、試合の後。鬼道と佐久間、そして帝国GK雅野の案内で帝国学園地下にやって来た雷門イレブンは、思わぬ再会を果たす。前雷門中学サッカー部監督の久遠道也がそこにはいた。

『お前達、まだまだ至らない部分だらけだ』……と言いたいところだ

が、良い試合だった。円堂監督と共にしっかりと反省し、今後のプレーに活かすように！」

「はい!!」

久遠の言葉に、元気よく応える雷門イレブン。今は違う、少し前まで当たり前だった光景がそこにはあつた。

そんな彼らを横目に見ながら、春奈が鬼道へと疑問を投げかける。

「それで、兄さん。ここに私達を呼んだ理由って?」

「そう焦るな、春奈……ほら、もう来たぞ」

「皆様、お集まりになつていらして?」

鬼道の言葉と共に部屋の壁に偽装されていた扉が開き、謎の男を二人引率れた雷門夏美が姿を現す。

「雷門サッカー部の皆、お疲れ様。良い試合だったわね。」

「理事長!」

「……それと、後ろの方々は?」

神童が疑問を投げかける。

「響木正剛だ。宜しく頼む」

「雷門総一郎だ! 宜しく頼む!」

「宜しく願います!!」

響木と雷門の挨拶に、雷門サッカー部の面々は礼儀正しく挨拶を返す。少年サッカーにおける目標の一つは良い人間性の形成だ。その成果を見た大人達はふっ、と柔らかな笑みを浮かべた。

「さて。挨拶も済んだところで、早速本題に入りますよ。」

試合の後で疲れているでしょうけど、雷門サッカー部の皆にも立ち会って貰うわ。というより寧ろ、主役は貴方達ですもの」

「俺達、ですか?」

「単刀直入に言おう。私達は、ファイブセクターの次期聖帝にこの響木正剛を候補として出馬させようと思っている」

一部を除き、雷門イレブンの頭の上には?マークが浮かんでいる光景が幻視される。まだ話を飲み込めていないようだ。

「お前達も知っているだろうが、先日の八百長騒動でファイブセクターの影響力は落ち、今年のホーリーロードが始まってからと言うも

の、勝敗指示に従わない学校とチームが急増した」

「え、それって良い事なんじゃ……?」

「それが、そうとも言い切れない。」

現在、ファイフスセクターは各学校に送り込んだシードや、息のかかった大人を使い、指示に従わない学校を外から内から潰している。奴らはもはや手段を選ばず、反対勢力を潰すつもりだ」

「私もファイフスセクターの前身である、日本サッカー協会の前会長として止めようとしたが、無駄だった。既に全国区の進出校はその殆どが奴らの手に堕ちるか、或いはサッカー部そのものが廃部となった」
久遠の言葉に反応した天馬の言葉を、響木が否定した。更に追い討ちをかける様に、雷門総一郎から絶望的な事実が提示される。

当然、雷門イレブンには動揺が走る。

「な、なんだって!?!」

「そんな……酷すぎる!!」

「でも、それならニュースになる筈じゃ?」

「握り潰されているんだ。腹立つ事にな」

「私達の調査でも、今回の件には政財界の大物が関わっているという情報を掴んでいるわ。ここまで露骨な情報操作がある以上、間違いないわね」

鬼道と夏美から話された内容に、雷門イレブンが再び苦虫を噛み潰した様な表情を浮かべる。

「それじゃあ、調査結果をネットに流せば良いじゃないですか」

「確か、あの嫌な理事長と校長が雷門から追い出された原因もネットでの暴露だったよな」

「それなら誤魔化しが効かないし、皆にも分かかって貰えるんじゃない?」

「それも無理だ」

一部の三年生のメンバーと二年生のメンバーから提案が為されるが、それを否定したのは久遠だった。

「私の時には『雷門中』と『イナズマジャパンの元監督』という分かりやすい知名度と実績があったからこそ、あの様な形になっただけだ。ここまでは大きく、薄く、信憑性を確かめるのも難しい情報ではどう

にもならないだろう」

「下手すると、情報を流した側が追われる身となるかもしれない。この手の奴らは、それ程までに危険な相手なのだ」

雷門総一郎の言葉には重みがあった。

当時をよく知る響木や久遠、身近にいた者が被害を受けた事のある円堂や鬼道や佐久間、春奈や夏美でさえ、険しい表情を浮かべている。

雷門イレブンは、何も言えなかった。

「……とにかく、奴らはこれまでの水面下でサッカーの得点を管理する体制を捨て、強硬策に出ている。

こうなった以上、フィフスセクターの内部から正式に解散手続きを踏む以外に方法は無い。それを実行することが出来るのは聖帝だけだ」

「聖帝選挙には、ホーリーロードの試合が判断材料として使われる。あくまでも選挙だが、その実態はサッカーの試合による代理戦争だ。

フィフスセクターの息のかかった学校が優勝する事になれば、自由なサッカーは永遠に失われるだろう」

「だけでもし、フィフスセクターの息のかかっていない学校が優勝する事態になれば……貴方達の手には、自由なサッカーが戻る事になるわ」

「そして、ホーリーロード出場校でフィフスセクターの支配が及んでいない学校は一つだけ。その唯一の存在が……お前たち雷門中と、雷門イレブンだ」

「ここまでの試合を乗り越えて来たお前達を、お前達のサッカーを我々は信じている。自由なサッカーを取り戻すため、ホーリーロードで優勝を勝ち取って貰いたい!!」

「……!! はい!!」

自分達が全力を尽くし勝ち抜くことが、人々を極悪非道から救う事になる。そんな話を聞かされて、ハートに火がつかない人間は殆どいないだろう。雷門イレブンも例に漏れずそうであった。

「……」

ただ、一人を除いて。

幕間：乗り越える者達と乗り越えた者達

帝国戦から三日後。時刻はサッカー部の練習が終わった夕方。俺と速水は炭酸飲料の入ったペットボトルを片手に、河川敷のサッカーグラウンド脇の設置されたベンチに並んで腰掛けていた。

「サッカー部を辞めたい？」

「うう、言っちゃいました……」

なんでかって？ 練習が終わって浜野と一緒に帰ったはずの速水が、暗い顔して歩いているのを偶然にも発見したからさ。困っている友人を放って帰る事なんざ出来るわけないだろう。

「わかってます。こんな事は誰にも言うべきじゃないって……でも……」

「言っても良いんだよ。というか、そういうのは寧ろ積極的に言っていけ。信頼のおける誰かにな」

「え……良いんですか？」

「え？ 駄目だと思ってたの？」

「は、はい……」

俺の言葉に速水は驚いた表情を浮かべる。

正直呆れたよ。彼の抱える歪さはかなり深刻らしい。

「……お前さ。サッカー部の皆とサッカーしてきて、彼らの事をどう思ってるんだよ。お前の悩みを『下らねえ』とか『お前が弱いだけだ』なんて言っただけ切り捨てる様なクズは一人も居ないだろ？」

「そうですね……自分のことを自分で出来なきゃ、誰かに何かを相談する事なんて……」

「それがそもそも間違いだってんだ。

自分で解決できてりゃ、こんなに悩む事なんてねーだろ。完璧主義が過ぎるぞ」

「そ、そんな……」

「変にプライドが高いからそうなるんだ。

自分の理想と現実の差、過剰な保身思想、弱いままでいる事への甘

え。それら全部が今のお前を縛ってるってことに気付いけ。先ずはそこからだ」

「……………」

沈黙が降りる。速水の表情は暗い。

かなり厳しい言い方をしてしまった事は自覚しているが、速水くんが自分の殻を破って成長するには、彼の持つ過剰なまでの悲観的な思考回路を枷から武器に変えて行くことが必要だ。

……とは言え。これ以上は逆効果になりそうか、ここらで本題に入るでしょう。

「…………まー、とにかく話してみてくれよ。」

何が不安なのか、何が辛いのか。話してくうちに考えも纏まるかもしれないし。どんな結論を出そうが、俺は速水自身が出した結論を応援する。手放し全力でな」

「……………」

「…………あー。俺のことが信頼できない、話したくないって言うなら帰っても良いよ。引き留めるなんて狡い真似はしないさ。どうする？」

言い終わると、俺は炭酸飲料を一気に飲み干した。ちようど中身がなくなってしまったので、速水に断って近くのコンビニGマートに行き、2 Lボトルに入った水を購入して戻って来る。

速水は、まだベンチに座っていた。

「よつと…………残ってるって事は、話してくれるって事で良いか？」

「…………三国先輩は…………俺の話聞いて笑ったりしませんか？」

「当たり前だろ」

「それじゃあ…………聞いてください、長くなりますけど…………」

「短く話せ。長く話せば話すほど、話す方が辛くなるだけだから」

「え、ええ!？」

「…………そうだな、サッカーしながら話そうぜ。丁度ボールもあるしさ」

「あ、ハイ。それなら…………」

それから、俺達はボールを蹴り合いながら会話をする。速水が話した内容は、帝国学園戦後のこと。

よーするに、他人から成果を期待されてサッカーをするなんて嫌だつて事を言いたいらしい。うん、何というか……

「それは違うよー！」

思わず、論破！つて効果音が背後につく程の勢いで俺は叫んでいた。その声とは対照的に俺のボールコントロールが乱れる事はなく、ボールは鋭い軌道を描いて速水の足下に収まる。

「いいか？　まず前提からして違う。」

響木さん達が言つてた事つて『お前らがホーリーロードの最中もその後も自由なサッカーを続けられる様に、俺達大人が全力でサポートする』という意味だぞ」

「え……？」

「フイフスセクターを倒すための最も確実かつ安全マージンの取りやすい方法が俺達の優勝つてだけで、奴らを潰すことだけが目的なら他に幾らでもやりようはある。」

「……それは、本当ですか？」

「多分な。子供の俺が幾らか予想できるんだから、大人のあの人らが気付けないなんて事あ無いだろうよ。」

「それじゃ……それじゃ、なんであんな僕達に責任を持たせる様な言い方をしたんですか！」

「おつ、と」

すると、速水が急に怒りを爆発させ、速水は堰を切ったように怒りの言葉を捲し立てる。ボールコントロールも甘く、速水からのパスは大きく右に逸れた。俺は一旦ボールを蹴るのを止め、ボールを保持したまま速水からの話を聞く体勢に入った。

「期待や責任なんて背負わされるだけ辛いだけなのに！　こんなに辛くなるならフイフスセクターになんて逆らわなければ良かったんだ！　皆がやるからやつてただけで、僕はそんなに強くないんだ！」

「……それがお前の本音か」

「ええ、そうですよー！」

望みもしない期待を背負わされるくらいなら、フイフスセクターの下で管理サッカーをやらされている方が良かった！　僕は名も知ら

ない誰かのためにサッカーをやってる訳じゃないんだ！

そんなにやりたければ怖いモノ知らずの先輩達や、無知な一年生達だけでやればいい！ 僕は――」

「甘ったれた事を言っつてんじゃねえ!!」

「……!!」

並外れた肺活量とインナーマッスルの強度を誇る俺の肉体から発された怒気が、速水の発する怒気と正面からぶつかり、霧散させる。

逃げ根性、臆病な性格。それは別に構わない。だが、流石にチームメイト達を見下す様な発言に至るまでの歪な根性には我慢ならず、怒りを爆発させてしまった。

こうなつては、計画変更だ。荒療治にはなるが、今ここで、目の奥の濁りごと速水の弱さの元を粉碎する。

「自分の弱さから逃げるな!!」

俺は、鋭くサッカーボールを速水に打ち込んだ。

スピードもあるし、シュートにも見える鋭さがあるが、紛れもないパスだ。いつもの速水なら取れるはずのグラウンダーパスは、彼の足に当たって跳ね返り、俺の下へと帰って来る。

「なっ!?!……逃げたいのは確かですけど、それはこの戦いからだ！

どうしてそれが俺の弱さになるんですか!」

「さっきのお前は、強くなろうと! ホーリーロードを勝ち抜こうと! 自由なサッカーを取り戻そうと! 必死に努力しているチームメイト達を侮辱した!」

それがお前の弱さてめえでなくて何なんだ!」

もう一度、今度は速水の胸を目掛けたキラーパス。速水が全力で受け取ろうとすれば取れる程度に威力は抑えた。

だが、速水は吹き飛ばされてしまう。ボールは真上に跳ね上がった後、速水の側に落ちた。それを見た速水は思い切りそのボールを俺目掛けて蹴り飛ばして来た。

……弱い、信念のこもっていないボールだ。何の重みも感じねえ。

「アンタに何が分かるんだ! 強くて最初から何もかも持っていたアンタに! 俺の何が分かる!」

「分かるさ！ 俺も昔は弱かったからな！

けど、俺はお前じゃない。お前は今まで、俺が想像もできない様な悪意や痛みに晒された事だつてあるのかもしれない！

実際に体験したお前だけの痛みがあるんだろう！」

そして俺は、速水の胸を目掛けてボールを蹴る。今度は誰でも取れる様な緩いパスだ。胸にぶつかり、足下に落ちたボールを保持したまま、速水は叫ぶ。

「っ！ そこまで分かっているのなら、俺の痛みだつて分かる筈だ！ 消えることのない、今でも胸の奥が苦しくなる様な痛みを！ 心の底から苦しくなる様な痛みを！ 無視して進めつてのか！

そんなこと、出来るわけが無い！」

「違うっ!!」

速水が怒りのままにボールを蹴り出す。軌道は俺の顔面。だが、そのボールを俺は片手で、思い切り腕を伸ばしきった状態でキャッチした。

激情の籠ったシュートだが、信念も魂もないボールに力などあろう筈もない。俺の手の中で急停止し、微動だにしない。

「お前のその痛みはセンサーだ！

誰よりも痛みや悪意が分かっているからこそ、それらを徒に振りまく連中を察知できる！ そんな連中から、大事な人達や大事な物を守る事が出来るんだ！」

「……………っ!!」

「弱さを！ 痛みを！ 乗り越えろ！」

自分の力に！ 周りの人達への優しさに変えろ！

自分の弱さから逃げるな！ 速水!!」

再び、速水がギリギリ取れるくらいの威力を込めた、速水の胸を目掛けたキラーパスを蹴り出す。先程は吹き飛ばされた速水だが、今度は果たして――

「ぬっ……………ん!!」

「ほぅっ？」

威力に顔を歪め、少しばかり体勢を崩したものの。しかし、しっか

りと威力を殺して自分の足下に落とすし、キープする事が出来ていた。

「よし、このくらいにしとくか。速水も来いよ」

「えっ、あっ、分かりました……」

再び俺達はベンチに腰掛け、それぞれの飲料を手に取り、口へと運んだ。

「あの、三国先輩。先程は失礼な物言いを……」

「おっと、その先を言う必要はないぜ。それを言うべき相手は他にいるだろ？」

速水が急に謝ろうとしてきたが、それを先に俺が制する。俺としては本音で語り合うのが目的だった訳だし、気にしちやいない。

「さっきの話に戻るけどな、響木さんや夏美理事長が俺達にあんな言い方をした理由は一つ。この状況すら、俺達が成長するための機会チャンスとして捉えているからだ。」

「……どういう、事ですか？」

「当事者意識って奴さ。俺達の意志で、俺達の力で、俺達のサッカーを取り戻す。今回の戦いを勝ち抜いた時、俺達には勝利の経験と自信、自分達の手で何かを成したという結果が残る。」

それは普通に生きてたんじゃ決して得られない財産として、俺達の力に、俺達の人生を輝かせる宝になる。夏美理事長達はそれを分かかって、俺達にそれを渡してやりたいって考えてくれてるんだ。」

「そう、だったんですね……」

「何より、大人達が政治的な手を使って自由なサッカーを取り戻したところで、それは結局、勝手な外野達に振り回されるだけのサッカーだ。根本的な事態の解決にはならない。」

俺達が惹かれたサッカーってのは、全身が沸騰するような熱いサッカーだろ？」

「いや、それは違いますかね」

「なんでそこは冷静なんだよオマエ……」

まあ、いや。それに、これは超極論だけどき。大人達にとっちゃ、俺達が自由なサッカーを出来ようが出来まいがどうでも良いんだ。自分達の生活に直接影響する訳じゃないしな」

「あ、確かに……」

「だから、俺達の戦いを応援する事はあっても、戦いの成果を期待するなんて事はしない。もちろん、良い意味でな。」

自分の行動に意味を持たせるなら、自分で納得する事が出来るモノにしろ。じゃなきや、辛い時にどうしようもなくなっちまう」

「そう……ですか……」

速水が納得したところで、俺の役割は終わりだ。

速水にこれだけ言った以上、俺自身が誰よりも強く、自分に厳しく在らなければならぬ。いつも以上に自分を追い込むとしよう。自己満足でなく、戒めとしてもな。

「速水、俺は帰るぞ。飲み終わったなら缶捨てるけど、どうする？」

「えっ、良いんですか？ お、お願いします」

「応よ。んじゃ、お疲れ！」

そして俺は鉄塔広場へと向かった。

???????

「ハアッ……ハアッ……」

くっそ、流石に応えたな……」

鉄塔広場でいつものタイヤトレニング100セットに加え、倒立腕立て伏せ100回、チンニング100回、タイヤを3つ担ぎ上げてのスクワット100回。それを終えたら河川敷のランニングコースで30kmのランニング。

ここが超次元サッカーの世界でなければ絶対にクリアできないであろう強度のフィジカルトレーニングを終わらせた俺は、河川敷のグラウンドで激しく息を切らす。

ぶっ倒れそうな身体を引き摺りながら何とかベンチに辿り着き、腰掛けながら水を飲み、ジャージのポケットからスマートフォンを取り出して操作しようとした時だった。

ピロリン♪と軽快な音が響く。メッセージアプリの通知音だ。

「ん？」

差し出し人は母さん。文面には『今日は職場の同僚と飲みに行くから、夕飯は要らないわ』と書かれていた。まあ、社会人だしそういう事もあるだろう。俺の生活力を信用してくれているのは分かるし、それは純粹に嬉しいね。

けれど、作るべき飯の量が二人分から一人分になるというのは気持ちの上でかなり響く。モチベーションがダダ下がりするのだ。

一人分かぁー……流石にこのコンディションでたった一人分の飯を作るのはキツイ。外食……それも、なるべく安く量を食べるところがいい。うーむ……雷雷軒だな。

「よう、三国じゃないか」

と思っていたその時、俺に声を掛けてくる人が一人。聞き覚えしかない声に慌てて立ち上がり、挨拶を返す。

「円堂監督！ お疲れ様です！」

「はははっ、そう固くなるなって！」

……特訓、相当追い込んだようだな

「いえ、当然です。俺は雷門の誰よりも強く在らなくてははいけませんから」

「そうか。困った事があれば言えよ？」

「あ、それなら早速。晩御飯を奢って下さい」

「晩飯だな？ よし、ちよっと待ってろ」

円堂監督はそう言うとは何処かへと電話を掛け始めた。碎けた口調からして親しい人物の様だが……一体、誰だろう？

「……そうか、分かった。ありがとな！」

三国。よかつたら、俺ん家で飯食つてくか？」

「へー、円堂監督の家……え、!?」

ちよっと待て！ 軽い気持ちで飯を奢ってくれって言ったらなんかとんでもないことになったぞ!?

いや、夏美さんのゲロ不味メシが実際どうなのか純粹に気になるし、食う分には別に構わんが……新婚さんの食卓、それも晩御飯の時間にズカズカ入り込むのは流石に良心が咎めるよ!!

「え、いや。流石にそれはご迷惑では……」

「心配すんなって！　これから夕飯を作るところだったみたいでさ。増えた分を買い足して帰る必要はあるけど、お前の分も作ってくれるらしいから問題ないってよ！」

「い、いや、そうではなくてですわ……」

「心配すんな！　本当に世界一美味えんだぜ、俺の奥さんの飯！」

「いや、味じゃなくて！　せっかくの監督夫妻のプライベートな時間に俺が入り込むのはどうかと思うんですが……」

「気にすんなって。サッカーと同じさ！」

一人でボールを蹴るよりも、皆で練習した方が楽しいだろ？　飯だってそういうモノだ！」

うおおお！　そうだったよこの方は!?

円堂守という聖人君子であると同時に価値観の基準がサッカーの宇宙一のサッカーバカだった!!

??????

結局、俺は円堂監督に押し切られる形で円堂家に連れて来られた。はえー、すつごいデカイ家。

「ただいまー、帰ったぞー！」

「お帰りなさいー！」

……ん？　夏美さんにしては声が少し高いような……？

と思っていたら、家の奥から姿を現したのはスミレ色の髪とアメジスト瞳の美女。彼女は円堂監督を視認するや否や、円堂監督に駆け寄って熱い抱擁を交わした……おい、まさかこの人は。

「ただいま、冬っぺ！」

「へへっ、お帰り。マモルくん」

冬っぺじゃねーか!!

「……つと、そうだった。冬っぺ、これ頼まれてたやつ」

「ありがとうマモルくん！重かったでしょう？」

「ははっ！このくらい、どうって事ないさ！」

おいおい、めっちゃ見せつけてくれるじゃねえか円堂さんよオ……

いいぞ、もつとやれ！（クソデカボイス）

何を隠そう、俺は筋金入りの円冬派だ！ もうかなーり薄れつつある前世の記憶じゃ、イナイレ3のイベントは毎回冬っペを選択してたし、GOはダークを購入した。いやあ、尊いね！

「紹介するよ、三国。俺の奥さんの冬っペだ」

「こ、こんばんは！三国太一と申します！」

「円堂冬花です。貴方が三国くんね！」

マモルくんから話は聞いてるわ。お腹、空いてるでしょう。どうぞ上がって！」

「お、お邪魔します！」

それから冬花さんに導かれるまま俺は円堂家にお邪魔し、食卓について3人でご飯を食べた。

そして案の定、冬花さんの料理はめちやくちや美味かった。俺の料理の腕前も相当だと自負していたが、その遥か上を行かれたよね。味、栄養バランス、調理法。全てが完璧で、慈愛と温もりに溢れている……まるで「愛、愛ですよ、タイチ……」と囁かれる様な晩御飯だった。

「へー、円堂監督と冬花さんは幼馴染ナンデスネー。驚イター」

「ああ。つつても、小さい頃に離れ離れになって、再会したのはフットボールフロンティアインターナショナル……FFIの予選前だったんだけどな」

「その時、私は記憶を失っててね。記憶を取り戻すまで時間は掛かったけど……そんな私にマモルくんはよく話しかけてくれたり、褒めてくれたり、デートをしてくれたりしたのよ！」

「いやあ、当時はデートのつもりは無かったけど……今思い返せば、そういう事になるよなあ」

「ふふつ、照れ臭くなっちゃうね」

「おっふ……せ、正式に付き合いだしたキツカケとかって聞かせて頂けたりしますか？」

「ええ、良いわよ！ あれはFFI決勝戦の朝……」

「ああ、覚えてるぞ。冬っペがペンダントをくれたんだよな。そんで

応援してくれて、頬に……俺が冬っぺの事を好きだって気付く様になつたのはそれからだな」

「うんうん。それで日本に帰ってきて、私からマモル君に告白したの」「それから付き合い始めて……喧嘩する事は何回かあったけど、それでも別れることはなかったよな」

「だって、私は……マモル君の事が、好きだから」

「へへっ……そりゃ俺もだ、冬っぺ」

「なるほどお、ご馳走様です」

「あら、コーヒーのお代わりは大丈夫？」

「あ、ありがとうございます。頂きます」

食後にコーヒーを飲みながら円冬夫婦の話を聞いていると、お茶菓子が要らない。なんなら砂糖は入っていない筈なのにコーヒーが甘い。今なら食パンですら、3斤くらいジャムも蜂蜜もつけなくて食えそうだ。

ここまで純愛と尊さの波導に当てられると「俺もこんな恋愛がしたいわー!!」という気持ち湧き上がって来る。転生者として生まれた事による特権だけ……ああ、円冬尊い……

「そういうえば、三国くんは”ゴッドハンド”が使えるんだよね。どうやって覚えたの？」

「そういうえば俺も気になるな、どうやったんだ？」

「それはもう！ 円堂監督の試合映像を観てイメージを固め、タイヤトレーニングで体と気の運用を只管に鍛えました！」

空手や相撲みたいな臍下丹田に力を入れての踏み込みと、正面からボールを捕らえる気迫！ いやー、再現して自分の技に落とし込むまでが大変でした！」

「あらあら」

「分かってるなあ！ よし、三国！お前には爺ちゃんの秘伝書を読ませてもらおう！」

「うわあ！ ありがとうございます！」

暫くして、円堂監督が一冊のボロボロになったノートを手に帰って来た。慎重な手つきでページを捲るも……

「……いや、読めねえ!!」

何つつつだこれ!? アニメのアレでもデフォルメされてたのかよ!? 分かりやすく言うなら、薩摩弁や津軽弁の楷書体バージョンみたいな感じだ! 汚い字どころか暗号だつて言われても信じるぞ!?

「ん? 俺と冬っぺは読めるぞ、なあ?」

「ふふっ、ここに書いてあるのは『ゴツドハンド』の極意』よ」

「どうかその読み方、失伝させないで下さい。いや本当に」

結局、『ゴツドハンド』の極意」は口頭で教わった。